
双子の破面と十刃

ロンパニール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の破面と十刃

【Nコード】

N6194W

【作者名】

ロンパニール

【あらすじ】

故郷を追い出され、生きる意味を奪われた破面の3人。闇の世界に逃げ込み、引きこもり続けた。しかし、そんな3人に、ある男が手を差し伸べた。その男は優しく言った「初めまして」その日から、3人は男の道具となった。いつもはクールな破面たちも、3人によりあわただしい時間を過ごす。

一回消しました。もう一度新しく作り直します。
主人公は同じですが、話しが全然違いますが、ツツコンなら負けで
す！
誰でも感想送れます。

第一話（前書き）

読み返したらちよっと気に食わなかったのもう一度新しくつくりかえることにしました。

話しは全然違うと思いますので、楽しめると・・・思います。たぶん。

第一話

双子と一人は、仲よくいた。

双子は狼神、一人は普通の破面だった。

3人は生きる意味もなく、ただくだらない話をしながらすごした。

しかし、ある日、女はあるものに出会う。

その者と出会い、女は生きる意味を掴んだ。

残りの2人も、女が生きる意味を掴んだから、自分たちも一緒に生きる意味を掴んだ。

しかし、意味は壊された。

女の友は、友の仲間に殺された。

女は狂った。

狂い続け、殺し続けた。

そして、落ち着くと、闇の世界に引きこもった。

残りの2人も一緒に引きこもり、生きる意味を探さないようになった。

そのまま、3人は闇に閉じこもり続けたが、ある日、女の気まぐれ

で光が入り込んだ。

その光はとても温かかったが、とても残酷だった。

第2話始めまして

謀反をした藍染は、要、ギンを連れて、虚が住む、虚圏に居た。
優雅に紅茶を飲み、これからのことについて考える。

藍染（さて……十刃はそろった。だが、もっと必要だ……噂を
信じてみるか……）

紅茶を飲み終え、

藍染「要。いるかい？」

要「はい、藍染様」

呼ぶと直ぐに来た。

忠実な部下、東仙 要が。

藍染は、頼みごとをする。

藍染「……これから、ギンも連れて3人で銀狼の噂を信じて噂の
3人を探しに行こうと思うんだが……いいかな？」

要「私が決めることではありません。王はアナタなのですから」

藍染「ああ、そうだったね……ギン、来るだろ？」

ギン「なぐんや、ばれてましたん？おもろないなあ」

気味の悪い笑顔で出てきたのは、聞き耳を立てていたギンだ。
当然、行くに決まっている。

3人は何も喋らず、目的地に向かいはじめる。

3人は、何も無い、砂漠にいた。
周りを見渡すが、石もない。

ギン「噂やとこら辺のはずやんな？誰もおらへんで？」

藍染「ああ、そうだね・・・やはりただの伝説の噂なのかな？・・・仕方がない、帰ろう」

要「ハイ・・・！！」

帰ろうと一歩歩いた時、要が何かを感じ取った。

そして、斬魄刀を抜き、何も無いところに向かって振った。

すると、いつの間にかいた男に受け止められた。

藍染は、自分が気づかなかったことに驚く。

紫の髪の男は、優しそうな目で、3人を見る。

「・・・なんかようか？オレはアンタたちのこ知らないんだけど」

ギン「・・・どうやら、噂は本当やったらしいな」

藍染「そうだね」

「よお、クソガキ。何の用でここに来たんだけ？ここは虚でもめつたにこないぜ？」

なのにいきなり隊長クラスのやつが3人・・・俺たちを殺しにきたのか？ああ？」

藍染「・・・」

またもや、気づかぬうちに破面が二人増えていた。

一人は、銀髪の絶世の美男。

もう一人は、またもや同じの絶世の美女。
顔がほとんど同じだから、双子のようだ。

二人とも、前髪はハリベルとウルキオラのように鼻にかけ、横髪は顎までのものと、肩までのものがあり、頭の上は、ハリベルと同じように、鮫の背びれが逆向きになったようになり、残りの後ろ髪はポニーテールにしてくっくつている。

男は肩までだったが、女はおろせば地面にギリギリ届くくらい長い長髪だ

しかし、女の足元は黒い霧のようなものがでており、霧からは黒く大きな手が何本も出ていた。

女は切れ長の、すましたような目で3人を睨みつける。

「・・・何者だ・・・」

しかし、それには答えず、藍染は、手を指し伸ばし、そして。

藍染「初めまして」

「「「!!!??」」」

まったく予想していなかった言葉、

3人は目を見開いて藍染を見る。

第3話仲間

「「「……」」」

どうすればいいか、3人は目を合わせる。

すると、女が魔の手を操り、藍染の首を斬る寸前で止め。藍染は余裕そうな表情を崩さない。

「……貴様、我らをどうするつもりだ。答えろ。さもなければ、命はないぞ」

要「貴様！藍染様に何をする！！」

「馬鹿が。我は貴様には聞いていない。こやつに聞いておるのだ。邪魔だ」

要「！！！！」

霊圧が押し掛かる、たえきれなくなつた要はその場に膝をつく。そして、ありえない、とつぶやく。これほどの霊圧、藍染さえ超えてるかもしれないと思うほど大きいのだ。

要「そんなバカな……藍染様を超えてるなど……」

「なんだよ、この程度かよ。
つまんねえなオイ！少しは楽しませろよ！！」

藍染「・・・私達の目的は、君たちに仲間になってもらいたいだけだよ」

「仲間？・・・どうするんだ？」

「決まってるだろ！！誰が仲間なんかになるかよ！！」

「いや、なるう」

「はあ！？いきなりどうしたんだよ！！」

女は、男のことを無視し、霊圧を下げる。
そして、

「我らは、貴様の仲間になるう。貴様等なら、簡単には死なないだ
るう」

微かに藍染は微笑んだ。

十刃たちは騒いでいた。
なぜなら、急に集められたからだ。

グリムジョー「はっ、なんだよ用ってのは!」

ウルキオラ「新しい破面を見つけたらしい。ついさっきな」

ハリベル「……」

ノイトラ「はっ!もしオレより強い女だったらぶっ殺す!!」

藍染「やあ、遅くなってすまない」

笑顔で入ってくる。

一気に静かになる。

藍染は静かになったのを確認すると3人を呼ぶ。

藍染「さあ、来ておくれ、ガイヤ、ロイヤ、ワロン」

ロイヤ「チツ……」

ガイヤ「……」

ワロン「うわ！破面がいっぱい！」

3人が出てくる。

皆は銀色に輝く双子を見て息をのむ。

触れれば壊れてしまいそうなほど繊細な輝きを放っている。

藍染「彼らは、ついさっき見つけた破面。

特にガイヤとロイヤは破面だけど狼神だね。

昔、あの元柳斎を遊んで倒したらしい、それほど強いんだ。

二人は一緒に十刃にするよ」

ザエルアポロ「そのカスは？」

藍染「……そうだね……二人の従属官はどうだい？

それなら一緒にいられるけど」

ワロン「あつ！じゃあそれがいい！！オレ一緒に居たいからな！

サンキューなチヨロ毛！！」

藍染「ちよつ……！！チヨロ毛！！！？？」

ワロン「あれ？駄目か？じゃあオツサン」

藍染「オッサン！！！？僕はまだまだ若いよ！！まだ若い方だよ！！」

ワロン「見た目がオッサン」

ウルキオラ「貴様、後で来い。藍染様のことについて、嫌というほど教えてやる」

ワロン「遠慮する。ごめんなさい」

少しショックを受けている藍染をほって、双子はそれぞれ椅子に座る。

ワロンは出て行けと言われ、泣きながら出て行った。

要「新しい仲間だ。喧嘩せずに仲よくするんだぞ。特にグリムジョー
ー！！」

グリムジョー「オレは大丈夫だよ！！いちいちうるせえな！！」

ノイトラ「ヒヤハハハッ！！目つけられてやんの！！」

要「お前もだノイトラ！！」

ノイトラ「まじで！！！？」

要「後は・・・ヤミーもだな。喧嘩しないようん・・・」

られ、さらに強力な説教をされる。
藍染はまだシヨックを受け、ブツブツいていた。

（・・・お母さんですか・・・）

第4話探検

3人はブラブラと、探検気分で歩き回る。

長い間何もないところで引きこもり続けた3人には驚くことばかりだ。

長い、白い道を熱き続ける。

ただ、建物がどうなっているのか気になったので歩き続ける。

ワロンなど、大声を上げて驚いている。

ロイヤ「…ずいぶんでかいんだな…ぶつ飛ばしてえ…」

ガイヤ「長い、長いときの中で周りが変わるの当たり前か…
我らも、変わろうとしている」

ワロン「すげー！！こんなにでかいのかよ！」

一人、走り出し、どこかに行ってしまう。

2人は止めずに微笑みながら見送る。

お調子者でお気楽なワロンは二人にとっいたら弟のような存在で、大切な仲間・友だ。

ガイヤ「相変わらずだな…千四百年の間に少しは落ち着いたと思っただが…
やはり、無理か」

死神や虚でも戦いの中そう長く生きられるのはほんの一握りだ。

ロイヤ「まあ、いいんじゃないかねえの？それがアイツなんだし」

ガイヤ「フム・・・それもそうだな・・・変態さえなければいいやつなのだがな・・・」

ロイヤ「それは言うな」

ガイヤ「・・・」

少し・・・いや、かなりガイヤにだけ対してワロンは変態だ。

それは、ガイヤに惚れているからだと分かっているのだが、好きすぎて変態になっている。

あの時、一緒に居させてほしいと言われ、なぜ、と問うと、彼は迷いもなくこう答えた。

ワロン「その女の人に惚れたから！！！！」

馬鹿正直に言った。

あの時は珍しく2人で爆笑し、ワロンが顔を真っ赤にして「笑うな！！」と、言っていた。

ロイヤ「それが・・・なんでだろうな・・・あんな変態になったのは・・・」

「

ガイヤ「・・・なぜだろうな・・・」

遠い目をしてワロンが走り去った方向をみる、すると、影が見えた。二人は身構える。

ギン「なんや、双子やないの」

出てきたのはいつも張り付いたような笑みを浮かべているギンだった。会った時から二人はなんとなくあまりかかわりたくない人だと思った。

双子は無表情で見る。

ギン「そない怖い顔せんといてな。笑顔でおれば楽しいで？」

ロイヤ「・・・ハイ・・・」

一応、自分たちの主なので、敬語は使う。

ガイヤ「そうですね。ですが、面白くもないのに笑えません」

ギン「そうやな・・・まっ、世の中気楽に生き。君たちはいっつも難しそうな顔してる。」

たまには息抜きも必要やで。ほなさいなら」

ただ暇だったから話しかけてきただけなのだろう。少しだけ話をした後、どこかに行ってしまった。

ロイヤ「・・・なんなんだよ・・・あいつ」

ガイヤ「知らぬ。それより、さっさと見終わるぞ」

ロイヤ「はいはい・・・」

二人は歩き出す。

自分たちに仲間・友など必要ない、はずだ。

そう分かっているても求めてしまう。

永遠に生き続けることはとてもつらい。

死ぬこともできず、愚かな生き物たちを見続ける。

自分たちは仲間から見放された。

力が強すぎるために。

(なぜ、自分たちだけがこんな目に合わないといけないのですか?)

第5話企み

そのころ、こっそりワロンとガイヤ以外の十刃と藍染とで会議が行われていた。

いつものように紅茶をだす。

藍染「さて・・・急に集まってもらってすまないね。

今回の話はあの双子についてだ」

グリムジヨー「あの双子についてえ？別に話合うことなんかねえよ」

ウルキオラ「ゴミが。藍染様がおっしゃっていただろう。

アイツらは破面であり、神だ」

グリムジヨー「・・・」

藍染「そうだよ。

重要なのは、なぜここにいるかだ」

皆は黙る。

暫くして、ハリベルがつぶやく。

ハリベル「・・・普通なら天にいるはず・・・」

満足そうに藍染はうなずく。
望んでいた返事なのだろう。

藍染「ああ、そうだよ。

なぜ天にいないかのかだ」

ザエルアポロ「そんなの・・・ただの暇つぶしじゃないんですか？」

藍染「残念だけど違うね」

不気味に笑う。

藍染「君たちは知らないだろうけど。

あの二人は昔・・・千五百年前かな？その時、
『ソウル・ソサエティ 霊界・尸魂界』に
彼らはいんだ。

これは隊長になったものしか知らないことだが・・・

ガイヤは千五百年前に死神の友を殺されたらしい。

そのあとから、ここ虚圏に引きこもったらしい」

死神の友達、皆は顔を見合わせる。

なぜ敵と友達になっているのか分からなかったからだ。

もしかしたら自分を殺すために機会をうかがっていたのかもしれ
ないのに。

藍染「今、皆が思った通り、なぜ敵と友達になったのかは分からな

い。

ただ、何かをしていたのは確かだ。
ただの暇つぶしで友達になることはないからね・・・」

ゾマリ「そうですね」

ノイトラ「てかよぉ・・・あの紫のやつはいいのかよ？藍染様」

藍染「ああ、彼はいいんだ。

彼は本当に普通の虚みただからね。

かなり長く生きているみたいだが、十刃になれる力はない」

ふーん・・・と、ノイトラは興味を失せたのが、上を向く。

藍染「双子は何らかの事情でこの世にいる。

何をしようとしているのか分からないけど、これから何かするだろう。

皆、油断しないでくれ。

もしかしたら私たちを殺そうとするかもしれないからね」

全員「ハイ」

藍染「さて、これで話は終わりだ。
戻っていい」

一斉に立ち上がり、外に出ていく。
ハリベルは自分の宮に向かいながら考える。

ハリベル（何か企んでるようには見えなかった・・・
たとえうまくごまかせる奴等だとしても、必ず目などに現れる・・・
だが・・・あの目は本当に何も無い）

純粹な、何もたくらんらい無い目だ。

だが、自分達の王の命令だ。

双子について探ることにした。

自分たちは何もしていない。

なのに、居るだけで駄目だと言われた。

だけど、死ねなくて、消すこともできなくて。

会うたびにづるさいから、耐えきれなくなつて。

(なぜ、存在を否定され続けないといけないの?)

第6話空

双子は、建物の外で屋根の上で寝そべっていた。
偽物の空を見る。

ガイヤ「……偽物の空か、つまらぬ。やはり本物がいいな……」

ロイヤ「……現世に行ってみるか？大分変つてると思っぜ」

ガイヤ「……死神がいるから行かない。でも空は見たい」

ロイヤ「ワガママ言うな」

今頃ワロンは騒ぎまくっているだろう。

そして後で怒られる。

自分たちはそれを聞いて笑う。

ずっとそんなことが続けばどんなにいいか、いつも思う。

だが、無理だ。

自分たち以外は死んでいく。

それが当たり前。

自分たちは間違つて生み出された化け物以上に悪いもの。
存在してはいけないの物。

しかし、消えることができない。どんなに願つてもだ。

ガイヤ「よしっ、やっぱり行くっ」

ロイヤ「行くのかよ・・・めんどくせえな、たくっ」

そっぴいなから空間を裂く。

二人は空間の中に入った。

その頃、ワロンはおいていかれたことに気づき、泣きわめいていた。

久々の現世を見て、二人は息をのむ。

想像をはるかに超えて変わっていたからだ。

ガイヤ「・・・人間は恐ろしいな。こんなに変わっていくのか・・・」

ロイヤ「厭きれるな。自然があまりねえ。空気が・・・汚ねえ・・・」

口を手で覆い、もう片方で振り下ろされた刀を受け止める。

「なっ……!!」

受け止められると思っていなかったのか、小柄な体の死神は目を見開く。

ロイヤ「はっ、死神どもは相変わらず変わらねえみたいだな」

ルキア「くっ!!破面どもが!!」

ロイヤ「んだよ。文句あんのか?クソガキが!!」

ガイヤ「……」

睨みあい始める二人を、ガイヤはただ見る。
めんどくさいからだ。

ガイヤ「……暇だな……」

「だったら、オレと戦おうぜ、破面」

ガイヤ「・・・」

「スルーすんじゃねえよ!!」

オレンジ色の髪の毛の死神代行、黒崎一護。

しかし、ガイヤは興味を示さず、空を見上げる。

ガイヤ「空・・・千四百年ぶりの空・・・太陽・・・気持ちいい・・・」

目をひそめる。

その姿を見た一護は、あまりの綺麗さに声を失う。

日の光を浴びた銀色の髪は純銀に輝く。

雪のような白い肌も同じように純白に輝き、神を思わす輝きを放つ。

暫くの間見とれていたが、正気に戻り、刀を構える。

一護「抜けよ。どうせ後で戦うことになるんだ。」

今のうちに決着つけようぜ。いっとくけど、まだ仲間はいるぜ」

ガイヤ「それくらい霊圧を探ればわかる。

貴様は霊圧を探るのが下手なのか？」

一護「うっ・・・うるせえ!」

顔を赤くする。

ロイヤをチラリとみると、死神と口喧嘩をしている。

ガイヤ「馬鹿が、いったい何をしておるのだ・・・」

一護「行くぜ！！！！」

よそ見をしている間に斬りかかってくる。

しかし、ガイヤは響転でよけ、ロイヤの首を掴み、空間を裂く。逃げるためだ。

ルキア「待て！！逃げる気か！！」

ガイヤ「五月蠅い黙れ馬鹿が。我らは戦いに来たのではない」

それだけ言つて帰っていく。
残された死神たちは啞然とする。

一護「なっ・・・なんだっただ・・・？あの双子・・・」

ルキア「分からぬ・・・戦いに来たわけではない・・・ならば偵察にきたのか？どちらにしろ。

連絡せねば」

直ぐに連絡する。

冬獅郎たちも近寄ってきた。

冬獅郎「なんだったんだ・・・？アイツら・・・」

一角「そんなことよりまずいんじゃねえのか？破面が二人・・・ついこの前も二人・・・」

合計四人だ。後六人いれば・・・終わりだぜ・・・
オイ、どうした弓親？青筋たってんぞ」

そういうと、弓親は喋りだす。

弓親「だってあの双子！！どっちも綺麗だったんだよ！！？
まっ！僕の方が断然美しいけどね！！だけど気に食わないんだよ！！」

乱菊「何言ってるの。」

あの双子とアンタとじゃ月とすっぽんぼんじやないのもちろんアンタがすっぽん。

それより、私が気に食わないのは私より巨乳だったことよ！！
ムカつくーーーー！！」

弓親「誰がすっぽんだーーーー！！」

乱菊「アンタのことよ」

喧嘩を始めるが、冬獅郎の一言で終わる。

冬獅郎「とりあえず、作戦を立てる。
戻るぞ」

皆は瞬歩で消えた。

千四百年ぶりの空は眩しくて眩しくて

自分たちを消しそうなほど光が強くて

いつそのまま消してほしいと思った。

(本当に、消してほしい)

1・「話し」(前書き)

「話し」では それまでの話を簡単にまとめたものを書こうと思います。

1・「話し」

姉は歩く 故郷に背を向けて

弟も姉の後ろを ついていく

姉は狼神 この世で一番強く 美しい そして罪深い

弟も狼神 姉には劣るが強く 美しい

二人は幸せに暮らしていた

双子は力が強く とても美しい

しかし 強すぎるため 仲間から距離を置かれる

危険すぎるほど 力が強いから

遂に姉は追い出される

弟は後をついていく どこまでも

故郷を追い出され 孤独な双子

生まれたことを呪う

神を 仲間だった者たちを呪う

何をしても 死ねなわが身を呪う

追い出され 長い間 人間界をうろついた

寂しさをこらえながら

双子は離れず生きる

あるとき 紫の破面と出会った

破面は言った 惚れたからついていく

双子は笑う 数百年ぶりに

破面を仲間に加え 再び歩き出す

そんな時見つけた ある死神

姉はその死神と仲良しになった

生きる意味を持ち 弟も破面も生きる意味を持つ

長い間 一緒に居た

しかし 死神は殺された 死神に

姉は狂う やつとつかんだ光が消えたため

弟は止める 死んでも止める

破面は悔いる 姉を止められなかったため

敵も 仲間さえも殺す

3人は逃げ込んだ 暗い世界に

暗い世界に引きこもり 生きる意味を探すのをやめる

ある日 死神を手を差し伸べてきた

始めまして そろいいながら

仲間に飢えていた姉は 弟の静止を無視して その手を取った

その手は 残酷なほど冷たかった

ワロン「いつの間にか、ついたんだこのスプーン!!」

「誰がスプーンだ!!」

スプーンと呼ばれている第5（クイント）エスパーダ十刃、ノイトラ・ジルガは怒る。

彼は先ほどまで、自分の宮で昼寝？をしていた。

そんな時、ワロンが大声でわめきながら自分の宮を走り回ったので、目が覚めてしまい、文句を言ようと来たのだ。

ノイトラ「オレの昼寝を邪魔しやがって・・・殺す・・・」

ワロン「イヤ、オレはまだ死にたくない」

ノイトラ「テメーの意見なんか聞いてねえよ」

ワロン「まあまあ、落ち着きたまえ。君には心から謝ろう。

ご・め・ん・な・さ・い（棒読み）」

ノイトラ「うぜえ、イラつく、殺す」

ワロン「まっまで！話せばわかる!!!!」

必死にノイトラを止めようとする。

その時、ノイトラのフラシオン従属官、テスラ・リンドクルツが現れた。

テスラ「ノイトラ様ー？どうしたんですかー？・・・誰ですか？その人」

ワロン「ああ。オレは「ゴミ」「ゴミじゃない！！」

テスラ「そんなことより、ノイトラ様。まだ仕事終わってませんか？」

ノイトラ「さーで、寝るか」

テスラ「今日は逃がしませんよ」

ノイトラ「・・・」

自分に向けられていないのに冷や汗が流れ、動けなくなるほどテスラから殺気が出ている。

十刃のノイトラも冷や汗を流し、目が合わせられないでいる。これで目を合わせられる者は、たとえ勇者でもないだろう。そろりそろりと逃げようとする。

その時、ガイヤとロイヤが帰ってきた。

霊圧を探ってきたのだろう。

ガイヤ「おお、おったおった。ようやく見つけた・・・」

ロイヤ「探した・・・ぜ・・・」

テスラの殺気に思わず二人さえも足を止め、冷や汗を流す。
テスラ君、今の君に敵はいないよ。

その時、ノイトラとガイヤの視線が合う。

暫く見つめあっていたが、ガイヤが視線を外し、一言。

ガイヤ「キモちの悪い獣だな」

ノイトラ「……ンだとゴラア！！！！！！ぶち殺されてえか！！！！
メスのくせに調子乗ってんじゃねえぞ！！！！！！」

ブチ切れたノイトラが暴れる。

テスラが必死に止め、そのまま引きずっていく。

角を曲がった途端、テスラの説教の声が聞こえ始めた。

最初は大きかったノイトラの声がだんだん小さくなっていく。

可哀そうになり、3人はその場を去った。

笑い会うことが夢だった

その夢が叶った

でも まだ足りない

昔を忘れるほど楽しみたい

(もう、望んでも無理?)

第8話・泊めて

ロイヤ「あゝ．．．あーあー．．．ロイヤ・ザ・シルバーウルフだ．．．
です．．．」

一護「な．．．なっ．．．！！！」

ルキア「なぜだ．．．なぜ．．．」

「学校に来たんだ！！！！！」

ロイヤ「いや．．．何で来たんだろうな．．．」

なぜこうなったのか、時は数日前になる。

ガイヤ「藍染様が呼んでおる。さっさと行ってこぬか」

ロイヤ「だからって蹴るんじゃないやねえよゴラァ!!!!」

怒鳴りながら走っていく。

もう蹴られるのはごめんだからだ。

藍染がいつもいる部屋に入ると、涙を流して、顔面に足跡が付いた

藍染が居た。

正直、引いた。

藍染「うっううっ……ロイヤ……来たのか……（涙）」

ロイヤ「は……はい……その、すみません。ガイヤが……」

藍染「いや、いいんだよ……気にしないでくれ……」

遠い目でどこかを見る。

おそらく、本を盗られていくときに抵抗したのだろう。

その時に蹴られたみたいだ。

ロイヤ「でっ、用はなんですか？」

藍染「ああ、それだよそれ。君には暫く、彼らの足止めをしてもらう。

とっ、言うわけだ。死神たちがこっそり通っている学校に行ってきたくれ」

ロイヤ「・・・?!」

最初は、何を言っているのかわからなかったが、理解した瞬間驚く。それはそうだろう。

敵のいる学校に通うなど、わざわざ死にいくようなものだ。しかし、反論など聞かずに、現世に強制送還されてしまった。

ロイヤ「とっ、言うわけだ」

足止めのことは言わずに、ほかのことを言っ。
死神の二人は疑いの目でこちらを見てくる。

一護「……ウソだろ……」

ルキア「嘘だな」

ロイヤ「そんな目で見られたの生まれて初めてだわ。
とりあえず、しばらく現世にいるぜー」

一護「寝るところはどうすんだよ」

ロイヤ「……」

忘れていた。
命令があるまで帰ってくるなと言われてきたが、寝床はどこか教えられない。

このままではホームレスになってしまう。

チラリと一護を見る。

その目で何が言いたいのか分かったのか、一護は目をそらす。

するとロイヤは、体を動かし、無理やりでも目線を合わそうとする。
そしたらまたもやそらされる。

またもや目線を合わそうとする。

暫くそんなことをしていると、耐えきれなくなった一護が話し出す。

一護「だーーーー！！無理だぞ！！絶対に無理だぞ！！！！だいたい、お前と一緒に住んでるなんて言ったら女子がうるせーだろ！！」

ロイヤ「なんでだ？」

一護「おまつ気づいてるだろ。お前の容姿で女子がみんな一目ぼれしちまつてるんだよ！！」

その通りだ。

絶世の美男子のロイヤが入ってきた瞬間、女子のほとんどは一発で恋に落ちた目になっていた。

もし、ロイヤの住んでるところを突き止めたら、毎日来るだろう。

一護はそれが嫌なのだ。

ロイヤ「んなケチケチすんなよ。哀れなこの子羊を養ってくれよ」

一護「どこか哀れだ」

ロイヤ「うるせえな。なっ、頼む。お前が加えてこなかったら危害は加えねえ。

それでどうだ？」

一護「・・・ホントだな？」

ロイヤ「おお、ホントホント」

一護「じゃあ、嘘ついたらハリ10本喉貫通させるからな」

ロイヤ「殺す気が！！？！？」

何だかんだ言いながらも了承してくれた。

コイツ、結構いいやつかもしれないねえ。ロイヤは心の中でそう思っていた。

こんな自分を受け入れてくれるのか？

こんな化け物以上のやつを？

神から嫌われたものを？

(久しぶりに、人の温かさに触れた)

第9話居候 現世

一護の家で、ロイヤは芝居をしていた。

ロイヤ「とっ、いうわけで……今のオレは親もいず、孤独なんです……」

嘘の涙をハンカチでふき取る。

ロイヤの前では、遊子と一心が涙を流している。
そして、

遊子「う……うう……！お父さん……！泊めてあげて……！」

一心「分かった……！好きなだけ泊まって行ってくれ……！」

涙を流し、そういう。

この時、一護は見た。

ロイヤがニンマリと笑っているのを

一護（こいつ性格悪いんじゃないかねえのか……？）

そう思った。

ロイヤ「小汚ねえ部屋だなオイ」

一護「追い出すぞ」

部屋を一言目がそれだ。

ロイヤ「おーおー、心が狭いねー。よつと」

ポスツと、ベットに座る。

他人の部屋なのに、居候なのに堂々とする。

一護「お前なあ……少しは遠慮しろよ」

ロイヤ「絶対嫌だぜ。そういや、あのクソチビはどこ行きやがったんだ？」

一護「ああ、なんか連絡するとかいってどっかいつちまった」

ロイヤ「ふん．．」

ごろりと寝転がる。

絶対に自分のことだろうと思いながら。

総隊長に知らせ、どうすればいいのか聞いているのだろう。

もしかしたら今すぐに死神が来るかもしれない。

しかし、焦らない。

なぜなら、ロイヤは強いからだ。

そんな簡単にやられない。

それに、自分には一撃必殺技がある。いざという時にはそれを使い、

逃げればいい。

ロイヤ（死神ねえ．．．いやなこと思い出すな．．．）

生きる意味を奪われた瞬間を。

ガイヤの姿を。

ワロンの悲しそうな目を。

さまざまなことがよみがえる。

あんなことがあった後、自分たちは闇に引きこもった。

一護「おい、おい！！！」

ロイヤ「ん？」

いつの間にか呼んでいたらしい。

一護を見ると、さらに眉間のしわがよっていた。

一護「テメーの目的はなんなんだよ！！教える！！」

ロイヤ「この馬鹿が。そんなの教えるわけねえだろ？」

一護「そうかよ・・・だったら、力づくでも教えてもらっぜ！！」

死神になる。

そして、ロイヤの首に刀を向ける。

しかし、ロイヤはすました目で一護を見るだけだ。

一護「・・・何とかいえよ、何かしろよ」

ロイヤ「・・・人間は愚かだなあ？自分たちのためなら相手のことなんか考えねえ。

自分たちさえよかつたらいい・・・相手の気持ちなんか考えねえ」

すました目のまま、話すが、このままではちが明かないので簡単に教えることにした。

ロイヤ自身も詳しくは教えられていないから本当に簡単になだ。

ロイヤ「オレの任務はお前達の足止めだよ。ほかは知らねえ」

一護「本当か。もっと他にあるんじゃないかねえのか」

ロイヤ「ねえよ。オレに教えられたのはそれだけだ。それでも信じないなら斬ればいい。オレを倒せるならな」

一護「……分かった分かった。もう聞かねえ。飯食いに行くぞ」

ロイヤ「飯……？……食い物！！！！」

ロイヤの目が輝き、一護を追い抜き、下に降りる。あまりの速さに、一護はしばらく呆然としていた。

人は嘘つき

死神も嘘つき

破面も嘘つき

神さえも嘘つき

(一体 誰を信じればいいのか?)

第10話勉強会 虚圏

一方、虚圏では、十刃だけの勉強会が開かれていた。ガイヤに勉強を教えるのと、ついでに十刃のみんなの知識をもっと増やすためだ。

ワイヤがガイヤにへばりついて一緒にやりたいと駄々をこねてきたが、柱に縛り付けておいてきた。

もちろん、提案は藍染だ。

すると、藍染に忠実なハリベルは張り切る。腰に手を当て、

ハリベル「と、いうわけだ。勉強会を始める」

と、言ったのだが、ほかのみんなの反応は。

スターク「寝る」

グリムジョー「帰る」

ウルキオラ「帰る」

バラガン「チエスでもせんか？」

ノイトラ「帰る」

ゾマリ「さあ、やりましょう」

アローニーロ「暗闇作ッテ」

ヤミー「メンドクセエ」

ゾマリ以外はやる気が0だった。

その返事を聞いたハリベルは、額に青筋を浮かべ。

ハリベル「よし、ゾマリ以外はとりあえず拳骨10発ずつだな」

ハリベル・ゾマリ以外「……………すみませんでした……………」

指をポキポキいわせはじめたハリベルに謝る。
彼女の拳骨10発など食らったら頭にひびが入るだろう。

鳴らすのをやめたハリベルは紙を配っていく。
問題用紙だ。

ハリベル「藍染様がわざわざ用意してくださったんだ。
もう一度言っぞ藍染様が わざわざ 用意して下ったんだ。
しっかりやれ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

誰も逆らえない。

藍染と従属官のことになるとハリベルは鬼になる。

一回、グリムジョーが逆らったのだが、フルボッコにあった。

それを実際に見たものは、ハリベルを怒らせないようにしようと思っ
た。

スターク「たくっ……めんどくせえな……え〜と何々？」ばら
を漢字にしてかけ？
ばら……こうか！！」

スターク解答：虚弾

皆は黙る。

その時、ガイヤがもつともな質問をする。

ガイヤ「思ったのだが。バラとはいったいどっちの方だ？破面の方
か？花の方か？」

ノイトラ「……オイ、どっちだよ」

ウルキオラ「もうこの際どっちでもいいだろう。どっちを書いても
正解だ。^{エサクタ}

なぜなら、「ばら」を書けしか書いてないからな!」

ビシッと、ウルキオラは無表情で親指を立てる。

それを聞いたみんなも、まあいいかと思いい、そのままにした。

1時間が過ぎ、喧嘩早い性格のやつらの集中力が切れ始めた。

ノイトラ「……だー！ー！！もう無理だ!!」

グリムジョー「疲れたぜ……尻いてえ……」

その隣では、ガイヤが面白そうに暗記をしていた。
覚えるのが得意なのか、次々にページをめくっていく。
目も輝いているあたり、かなり勉強が楽しいみたいだ。

ガイヤ「現世ではこんなことをしているのだな。面白い」

バラガン「フン、こんなもん、どこがおもしろいのかわからんわ」

一切手を付けていないバラガン。

横では、スタークが爆睡している。

もうそろそろやめようか、と、ハリベルは思う。

自分はまだいけるのだが、男子たちの集中力が切れるのは早い。

皆とするのはやめて、自分の宮でやるう。

もっとも、宮に帰っても、喧嘩ばかりして五月蠅いのだが。

ハリベル「よし、やめにしようか」

言った途端、ゾマリとガイヤ以外が一斉に立ち上がり、後片付けもせずに部屋を出て行った。

少し青筋が立ったが、直ぐに引っ込んだ。

なぜなら、

ガイヤ「歴史もこんなことあったの・・・か・・・」

隣でガイヤの輝いていた顔が曇ったからだ。

気づいたハリベルが気遣う。

ハリベル「どうした、大丈夫か？」

ガイヤ「・・・ああ、なんでもない。我はまだ暗記しておる。先に帰ってもよいぞ」

顔を元のすました顔に戻し、暗記を続ける。しかし、心の中では違うことを考えていた。

ガイヤ（いかぬ・・・昔のことなど思い出すなど・・・あれは何千年も前のこと・・・すべて忘れることができるならどんなにいいか・・・）

ため息をつく。

忘れたいが、能力のせいでは忘れることができない。自分で消そうとしたが、できなかった。

やはり、別の誰かにしてもらわないとだめだ。

ロイヤは駄目、ワロンも駄目。

後は・・・

あれ？ ほかに仲間なんて居たっけ？

そうだ、皆、死ンジャツタンダ　ワタシヲ置イテ

周りを見れば　いつの間にか仲間が消えていて

残っていたのは　弟と破面の二人だけ

それ以外のみんなは

死ンダ
ンダ
ダ
ダ
ッ
タ
ネ

(忘レ
テ
タ)

第11話作戦 虚圏

藍染は、一人で玉座で紅茶を飲んでいた。

前に、グリムジョーが「藍染のこともう紅茶王って呼んじまっっていんじゃないね?」とか陰で言われたとき、1時間くらいシクシク泣き、しまいには市丸にうざがられ、部屋を燃やされてしまった。

今では、ギリギリいい思い出だ。たぶん。

藍染「紅茶ー 紅茶ー こう……」

市丸「それ以上下手な歌うたいましたらもう一回部屋もやしますよ」

藍染「え……?ゴメンナサイ」

不気味な笑みを張り付けたまま、恐ろしいことを言った市丸に謝る。

市丸は大量の資料を持っていた。

藍染の前にその資料を下すと、これが何の資料であるか説明する。

市丸「これ全部、神についてかかれています。

こんなにあるんやから、中にはガイヤのことも書かれてるんとちゃいます?」

藍染「ああ、ありがとう。ついでに手伝ってもらえると嬉しいんだけど……」

市丸「一人でやり」

藍染「ギーーーーーーン!!!!!!!!!!!!!!」

瞬歩で消える。

「 comeback!!! 」などと言ったが、戻ってこなかった。
仕方がないので、要を呼び、調べ始める。

ちやくちやくと作業が進んでいる。
大切なことはまとめていく。

全てが終わっても、すぐにまとめた紙に目を通す。

要「……………藍染様、これを」

何か大切なことが書いてあったのだろう、目を通す。
お互い、見合いっこしながら、覚えていく。

藍染「……………ところで要。私はちょっと十刃を利用しようと思うんだ
が」

要「別にいいですが……………どんな作戦なんですか？」

藍染「ふふ……………」

不敵な笑みで、静かな声で作戦を説明する。

その作戦を聞いた要は茫然としていたが、すぐに姿勢をただし、「
藍染様がしたいのならばなさればいいのです」と、いった。

動かない、偽の空を見続ける。
別に意味はない、ただの気まぐれ。

ノイトラ「はあく……つんねえなあ……」

本音が出る。

もうすぐ死神と戦いが始まる。

それまでに大げがをしてはいけないと、藍染は勝負することを禁止してしまった。

戦い、死ぬことが生きる意味のノイトラにはきつい。

それで暇をもてあそんで部屋で暴れていたのだが、キレたテスラに

テスラ「ノイトラ様。ハッキリ言っと邪魔です」

と、笑顔で言われたため、外に出てきたのだ。

ごろごろと転がるが、目が回ってきたのでやめた。

そんな時、影が落ちた。

何だと思い、上を見る。

すると、そこにはすました目でこちらをみているガイヤがいた。

好きな神様は 神に慕われる

嫌いな神様は 神に遠ざけられる

何が神だ 神もしよせん

(愚かな生き物に過ぎない)

2：「話し」

置いてけぼりにされた破面

第5の宮で暴れまわる

そして怒られる

怒られながらも楽しそうに笑う

第5は ついに自分の部下に叱られる

可哀そうだけど 原因は自分たち

だけど知らないふり

仲間と楽しく過ごすこと

ずっと望んでいたこと

しなかったこと

夢は叶った

でも まだまだ夢はある

願ってかなうのなら いくらでも願う

でも もう無理なことみたい

不公平

人外界へ 命令でいった弟

敵の中へ行く

姉はボスの本を奪う

殴られたりしながら弟は行く

敵の家に嘘の芝居をし 泊まり 騒ぐ

喉に刃を向けられた

だが 別に慌てない

自分は 死ねないから

もし 自分を殺すことができるなら 殺してほしい

久しぶりの現世は 昔と全然違う

もう 神など必要ない

自分たちなど 必要ない

闇の世界で 勉強会

初めての勉強で 姉の目は輝く

男子は 黄金の女に怒られながら 勉強をする

知らなかったこと 知っていく喜びを久しぶりに思い出した

正しい答えなんてない 自由に書いていく 全部正解でいいじゃないか

その時 ふいに思い出した 昔のこと

直ぐに忘れようとするが 無理

あれは大昔 姉弟が絶望に落とされたとき

仲間を作っても みんないなくなってしまうた 思い出したくもない過去

ギン狐に冷たくされる

後からやってきた盲目の男に手伝ってもらい 作戦を立てる

作戦に利用されるのは 姉と第5

何も知らずに 二人は会う

男の手の中で踊らされると分からないまま

たとえ神でも どうせ 生き物だ

第12話：泣く

不機嫌そうにすました顔のガイヤを見る。

ノイトラ「んだよ」

ガイヤ「藍染様に言われた。しばらくノイトラと一緒に行動しろと。貴様が勝手に戦いをしたりしないように見張っておくためらしい。貴様は信用されておらぬな」

鼻で笑う。

怒り、斬魄刀をガイヤの首に当てる。

しかし、ガイヤは驚きも、脅えもせず、平然と立っている。その態度にさらにイラつく。

ノイトラ「なんだよその態度・・・オレのことを弱いと思って馬鹿にしてんのか？
アアッ！！！！？」

あの緑の髪をした女を思い出し、いらだつ。

大声で迫り寄り、首を絞める。

ガイヤは苦しそうに息をするが、声は出さない。

抵抗しないのなら面白くないので、手を離す。

暫く、ヒューヒューと息をしていたが、すぐに息を整えてしまふ。

ガイヤ「……なんだ、殺さないのか」

ノイトラ「……今はそんな気分じゃねえ」

ガイヤ「ほー……まっ、しばらく一緒にいるぞ。

言っておくが、我に怒っても意味がないぞ。怒るなら藍染様を怒れ」

ノイトラ「オレに死ねってか？」

ガイヤ「誰もそんなこといっておらぬがのー」

面白そうに微笑む。

そのほほえみを見ていると、なぜか一緒に微笑んでしまう。
すると、ガイヤが意外そうな顔をした。

ガイヤ「ほう、貴様でも微笑むのか。我はてっきりあの真っ白と一
緒で笑わないのかと・・・」

ノイトラ「やめる。アイツほどひどくねえ」

ウルキオラほど表情が少ないやつはいないだろう。

ガイヤ「あ奴ときたら・・・表情が変わるのは驚くときだけだからな。
まったく、面白くない」

ノイトラ「お前は暇だな。仕事しろ」

ガイヤ「そういう貴様こそ仕事しろ」

睨みあう。

がつ、先にノイトラが目をそらし、寝ころんだ。すると、なぜか頭を膝に乗せられた。別に害はなかったから無視したが。

ノイトラ「たくっ・・・オレは今から寝る！邪魔すんなよ！！」

ガイヤ「分かった。邪魔する」

ノイトラ「邪魔すんな」

ガイヤ「・・・邪魔する「すんな」・・・分かった分かった」

諦めたのを確認すると、目を閉じ、寝始める。

ガイヤはしばらく顔を見ていたが、厭きたのか空を見始め、ブツブツ独り言を言い始めた。

ガイヤ「・・・つまらん・・・偽物の空は。

所詮、偽物は偽物だな。友達も、仲間も友情も、全部偽物

全部嘘嘘ばかり。意味ない全部意味ない神さえも嘘ばかり言っ」

意味が分からないことを言ったが、気にせず寝ることに集中しようとする。

すると、頬に水が落ちてきた。

うつすらと目を開けると、なぜかガイヤが泣いていた。

ポロポロと、少しずつ頬を伝って涙が落ちていく。

まだ小さい声でブツブツ言っていたが、聞こえなかった。

ノイトラ（コイツが泣こうがオレには関係ねえよ）

そう思い、再び目を閉じる。

目を閉じたのに気付いたガイヤは、さらに涙をこぼす。

そのとき、どこからか震えるほどの殺気に当てられた。

思わず飛び起き、周りを見渡す。

誰も居ないので、霊圧を探す。

すると、一人の破面の霊圧があったが、弱い霊圧だったので無視しようと思う。

その間にも、ガイヤはポロポロ泣く。

ガイヤ「見る・・・しょせんこんなものだ・・・本当の仲間なんて・・・

あの人以外はいないんだ」

そういうと、フラッとどこかに向かって歩き出した。

後ろから声をかけても、聞こえていないのかのように行ってしまった。

ほっというてもよかったのだが、後で藍染に怒られるのは嫌なので、

追いかける。

ワロン（あ・ん・の・・・クソノツポが~~~~!!）

ガイヤを泣かせるとはいいい度胸じゃねえか!!絶対土下座させる!!
!!）

震えるほどの殺気を当てたワロンが鬼の形相でそんなことを言っていたのを、デイ・ロイが見つけたが、あまりの殺気に、声をかけられなかったらしい。

ほら 所詮こんなもの

自分が泣いても見て見ぬふり

やっぱり 本当の仲間は2人しかいないんだ

なんで期待なんかしたんだろ

分からない

(それ以上の仲間なんて もう無理なんだ)

第13話：一人は嫌 現世

一護の部屋から、すやすやと規則正しい寝息を聞こえる。
そんな部屋に、部屋の主、一護は向かっていた。
そして、乱暴に戸をあけ、怒鳴る。

一護「起きろ！！！！いつまで寝てんだテメーは！！！」

ロイヤ「zzzzん？・・・おはよう、死代」

一護「死神代行を略すのやめろ。てか、早くしろよ！遅れるぜ！」

ロイヤ「まじか！！？ちよっオレの制服どこだあ！！！！
もう飯いらねえ！！！」

バタバタとあわただしく走り、着替える。

鞆の用意は昨日の夜にしておいたから後は弁当を入れるだけだ。
急いで弁当を掘り込み、靴を履く。

すると、遊子がロイヤの口に無理やりフランスパンを入れる。

遊子「どんなに忙しくても朝ごはんはちゃんと食べなきゃ！！！」

ロイヤ「はい」

素直に返事をし、フランスパンを食べながら家を出て、走り出す。

後ろから一護もついていく。

一護「たくっ・・・昨日夜更かししてなきゃこんなことにはならなかったのによ」

ロイヤ「うるせえ!!」「漫画」っていうのが面白いのがいけねえんだよ!!」

一護「次の日に読めばいいだろ!!!??」

ロイヤ「続きが気になんたろうがよお!!!!」

一護「がまんしろ!!」

大声をあげながら走る。

周りの人から痛い視線が刺さってくるが、無視した。ふと、思った。

一護（なんで一緒に泊まってんだろうな・・・
てか、なんでオレは待ってんだ?おいてけばいいのに・・・）

不思議だ。

なぜか気になってしまう。

なんだか可哀そうになってしまうのだ。

夜中の時、ちゃんと寝ているのか気になり、見てみると涙を流していた。

それからだった、一人にしてはいけないように思い始めたのは。

一護（きつとこいつの体から出てるんだろうな……一人はいやだっていうのが……）

自分はそれを感じ取ったのだろう。

完全な人型のところを見ると、戦闘能力は隊長格ぐらいだろう。そんなに強くても、一人は寂しいのだ。

ロイヤ「何してんだクソガキイ！！おせえぞお！！！！！！」

一護「うるせえな！！！！」

スピードをあげようとした、その時、現世に派遣された死神がロイヤを囲んだ。

ロイヤは、最初は驚いていたようだが直ぐにニヤツと笑い、儀骸を脱ぐ。

ロイヤ「おんやー？死神が焦ってどうしたんだー？」

そついうと、刀を首に突き付けられた。

日番谷だ。

日番谷「・・・何の真似だ・・・」

ロイヤ「ずいぶん、血が多い隊長だな。そんなんじゃ、死ぬぞ」

日番谷「!!!!」

目の前に刃が迫まってきた。

体を曲げ、何とかよけるが、額のところが少し切れてしまった。血が流れる。

刀を振ったロイヤは、刀についた血をなめとる。

ロイヤ「ふん・・・まずい血だな」

日番谷「・・・」

ロイヤ「安心しろ、殺しても、テメーみたいな血のやつは食わねえよお!!!!!!」

刀を振り上げ、斬りかかる。

両手で何とか防ぐが、腕力の強さの力が分かり、力勝負では駄目だとわかる。

ロイヤ「アハハハハッ!!!!死ねよガキイ!!!!」

一角「おいおい、俺たちのこと忘れてねえよなあ?」

後ろから、一角が襲い掛かる。

しかし、次の瞬間。ロイヤが消え、自分の横腹から血が流れ出した。
響ソニード転を使っソニードたらしい。

乱菊が一角の後ろに移動したロイヤに向かって斬りかかるが、刃のついていない方を踏まれ、刀が地面にめり込んでしまう。

ロイヤ「なんだよ！テメー、副隊長だろ！？なあ！この程度なの
よアア！！？」

乱菊「グツ！！」

腹をけられる。

その隙に、弓親がロイヤの背中を狙う。

しかし、簡単によけられてしまう。

ロイヤ「限定解除しろよ。そうしてもしよせん、雑魚は雑魚だがな
あ」

日番谷「テメー……！！」

すると、ロイヤは何か気づき、儀骸を来た。

ロイヤ「とっ、そろそろいくぜ。学校に遅れちまつからなあ」

日番谷「テメー・・・ふざけるのも・・・」

ロイヤ「じゃな」

凄い勢いで走っていく。

一護「まつ・・・まで、黒崎」・・・」

日番谷「お前・・・何でアイツと一緒にいる」

一護「なんでつて・・・まあ・・・頼まれたのと・・・なんとなく・・・
一人にしたくなってな・・・」

乱菊「何々！？アイツに恋したの!？」

一護「んなわけねーだろ。アイツからな、一人になりたくないって
いうオーラみたいもん？そんなもん感じ取って・・・
可哀そうになつて・・・」

すると、ため息をつかれた。

日番谷「はあ・・・もういい。学校で戦うわけにはいかねえし、こ
っちもいろいろ作戦を立てる。
今日はこれまでだ」

そういつと、消えてしまった。

一護は、遅刻しそうなのに気が付いて走っていく。

向こうで、「このヤロー!!遅い!!」「オレは悪くない!!」「など
という言葉が聞こえた。

自分が思ってるより 一人は寂しくて 恐くて

あまりの怖さに 足が動かないときがあるけど

それでも 一人で進まないと

背中を押してくれる人はいないから

(歩みを止めたら最後 そこで終わり)

第14話嘘 現世

越智「なんだ珍しいな。遅刻か？」

一護「いや、こいつがハグウツ!!!」

ロイヤ「いや、ただの寝坊だ・・・ですよ」

後ろで一護の腕が悲鳴を上げていたのを、クラスのみんなは見えていた。
席に戻ると、啓吾が騒ぐ。

啓吾「いや〜転入した次の日に遅刻するやつなんかいないんじゃないか？
!？」

お前って面白いな!!」

ロイヤ「・・・」

啓吾「シカトしないで!!お願い!!」

竜貴「啓吾・・・少しはおとなしくしなよ」

啓吾「だって!だってシカト・・・」

水色「はいはい、もういから黙ってくれませんか？」

啓吾「敬語嫌!!!!!!」

越智「五月蠅いぞー黙れー」

いつものように騒がしい朝。

ロイヤは笑顔になり、笑う。

その笑顔にほとんどの女子が心をつたれた。

昼休み、朝のことで一護は怒っていた。

一護「何すんだテメー！！別に正直に言えはいいだろうが！！」

ロイヤ「なんかカツコワリイじゃねえか」

騒ぐ二人に、ある3人が近づいていた。

織姫「……あの人……虚だよね……？」

石田「絶対そうだろう。黒崎は何で虚と一緒にいるんだ？」

茶渡「むっ。一護」

呼ぶと、二人とも振り向く。

オレンジと銀の普通の人ではありえない色の髪が揺れる。

一護「あっ、お前ら」

ロイヤ「ああ？」

茶渡「……」

睨まれているにも関わらず、茶渡は平然とロイヤに近づくと、その体を持ち上げた。

当然、ロイヤは暴れるが、今は人間と大差ないので、力が強い茶渡にかなうはずがない。

ロイヤ「何すんだ！！離しやがれクソガキイ！！！！」

石田「黒崎、君も来てくれ。絶対だ」

一護「……分かったよ」

どうせ話はロイヤのことだろう。簡単に予想できる。

また、冬獅郎のようになぜ一緒にられるのか聞かれる。

石田のことだから仲よくするなというだろう。しかし、一人にすれば壊れてしまう感じがして、一人にできない。

ため息をつきながら、石田の後ろをついていく。

屋上に來ると、茶渡はロイヤを地面に下した。が、逃げられない様に腕はつかんだままだ。

ロイヤは抵抗しない。儀骸を脱いで、すぐにでも斬りかかれたらうが、そうしないのは死神と戦わないためだろう。任務を全うしようとしているのだ。

石田はその状態のロイヤに尋ねる。

石田「君はなんのつもりだ」

ロイヤ「……めんどくせえ、オイ一護オ！テメーが説明しろ」

一護「オレかよ……」

めんどくさそうにため息をつき、簡単に話をする。
すると、石田の眉間にしわがよる。

織姫「……黒崎くん……この人には失礼だけど……信じちゃ駄目だよ。」

この人は敵だよ？」

茶渡「そつだぞ一護」

一護「そついつてもな……なんか……可哀そうなんだよコイツ」

そついうと、不機嫌になったのはロイヤだった。
眉間にしわを寄せて一護を睨む。

ロイヤ「はあ？オレが可哀そう？なめてんのか死神」

一護「お前、夜泣いてたぞ」

ロイヤ「！」

寝ていたので気が付かなかったのだろう。

目を開き、驚いている。

一護「お前が泣いてたのみで、一人にしちゃいけないような気がしたんだよ。」

一人が寂しいんだろ？なんとなくわかる」

ロイヤ「・・・バカいうな。一人が寂しい？そんなこと、オレが思うはずないだろうが。」

オレは虚だぜ。俺たち虚に「心」なんかねえんだ」

そういうと胸がズキリと痛くなった。

嘘だ。自分は正反対のことをいつている。

本当は一人が寂しい、虚にだって「心」がある。なのに、つい意地をはってしまふ。

ロイヤ（これはもう反射的にこうなっただんころうな・・・）

心を開いたのに裏切られるのが怖いから、心を開かないようにし、冷たくする。

一人が寂しいのに、自分から一人になろうとしている。心と体が正反対。

石田「とにかく。ここで早くやつつけておくか。帰らすかどっちかなね」

ロイヤ「……」

一護「おい！待てよ！！敵だからって悪いとは限らないだろ！！」

ロイヤ「……なんでオレを庇うんだよ……オレは敵だぜ」

一護「それでも一人になんかできねえよ！！」

ロイヤ「うぜえんだよ！！！」

その言葉に心が温かくなつたが、口から出るのは自分の意志に反して暴言。

ロイヤは茶渡の腕を振りほどくとドアを乱暴に開け、どこかに行つてしまった。

残つた4人は、黙っていたが、織姫が口を開く。

織姫「やっぱり……傷ついちゃつたのかな……？」

茶渡「……」

石田「ふん、敵だからあれくらい大丈夫さ」

一護「……」

結局、そのあと昼休みが終わってもロイヤの姿は見なかった。

分かってる

自分はただ逃げてるだけだって

分かっていても 逃げてしまう

(自分なんか 大っ嫌い)

第15話：喧嘩×2

どこかに行ってしまったガイヤを、ノイトラは探していた。

ノイトラ「たくっ・・・どこにいったんだあ？霊圧も消しやがったし・・・」

最初は霊圧を頼りに探していたのだが、途中で消されてしまい、当てもなく探すしかなかった。

まだ殺気を感じるが、どうせワロンだろうと思いついて、無視をし続けている。

その間に、ワロンの機嫌はドンドン悪くなり、殺気も濃く、鋭くなっている。

恋とはおそろしいものだ。

ノイトラ「オイ！！クソ野郎！！さっさと出てこい！！」

大声で叫ぶ。

近くにいた下級の破面たちは、「鬼ごっこ？かくれんぼ？」 「女に逃げられた？」とか、コソコソ話す。

当然、一発ずつ殴っておいた。

その中に、グリムジョーの部下が二人おり、「殴られた」 「五月蠅いカス」などと、たんこぶを作りながら会話をしていた。

その時、再びガイヤの霊圧を感じた。

今のうちにと、響転で移動し、ガイヤを見つける。

ガイヤはハリベルの宮の中にいた。

新しく来た3人は、自分の宮がまだないので、人の宮によく遊びに行く。

その中で知り合い、仲良くなっただろう。

勢いよくドアを開けると、ハリベルの従属官の女子3人がこっちを見た。

だが、気にせず、ソファの上に寝転んでいるガイヤに近づく。

身長が190以上あるので、ソファからは足が出ていた。

ノイトラ「・・・おい、何してんだ」

ガイヤ「・・・別に・・・何もしておらぬわ・・・」

ノイトラ「だったら何で泣いたんだよ」

すると、話を聞いたハリベルが眉間にしわを寄せた。

ハリベル「ノイトラ、お前女を泣かせたのか・・・最低だな」

ノイトラ「うるせえな！メスは黙っとけ！！」

アパッチ「んだとノツポ！！ハリベル様になんてこといつてんだゴ
ラァ！！！！」

ミラ・ローズ「テメーのその髪の毛全部抜くぞゴラァ！！！！」

ノイトラ「はげるわ!!」

自分の主を侮辱されて怒り始めたアパッチとミラ・ローズ。

ノイトラも怒り始め、ハリベルの宮は騒がしくなる。

そんな光景を、ハリベルとガイヤは黙ってみていたが、お互い微笑み、紅茶を飲み始める。

ガイヤ「いやなに・・・少し昔のことを思い出してな・・・」

ハリベル「そうか・・・すまない。うるさくて。ここではいつもこうなんだ」

ガイヤ「いや、賑やかでいいでわないか。羨ましいのう」

おかわりをしようと、入れ物に手を伸ばす。

その時、二人の横の空間が歪み、裂けた。

固まっている間に、儀骸を脱ぎ、抱えたロイヤが出てきた。

その顔を見たガイヤは、大方何か素直になれずに後悔している顔だと分かった。

歪んだ顔のまま、ロイヤはガイヤの隣に座る。

黙ってハリベルは新しい紅茶をだし、ロイヤの前に置く。

ガイヤ「どうした。何があった?」

ロイヤ「・・・死神に一人でいるのが寂しいんだろって言われた・・・」

・がぁー！ー！ー！ー！！！！
ゲフツゴボツ！！」

思い出して腹が立ったのだろう。

一気に紅茶を飲み、むせた。

それを見たガイヤは背中を叩く、すると、力加減を間違えたのか、バンバンツ！！という鈍い音が響いた。

直ぐにロイヤは背中を押させ、額に青筋を浮かべ、声を殺して痛みを耐えている。

ロイヤ「こ……の……！！」

ガイヤ「ああ・すまぬな。力を間違えた」

ロイヤ「どうやったたらこんなに力を間違えんだ！！！！」

ガイヤ「イヤ何、なんか力が入ってな」

今度は双子が騒ぎ始める。

ハリベルはため息をつきながらこめかみを抑えた。

喧嘩の末、ロイヤはガイヤに帰れと言われ、帰った。

ハリベルが大丈夫かと聞くと、アイツならできるといった。ガイヤも、ノイトラと一緒に居なければいけないので、ノイトラを追いかけて出て行った。

残った4人は、喧嘩もせずにゆつたりと過ごす。

ふと、ハリベルはロイヤのことを考えていた。

ハリベル（なぜだろうな・・・深く印象に残っている・・・）

あれだけ騒いだのに、なぜかロイヤのことしか覚えていない。ほかのことはあまり覚えていない。

ハリベル（アイツのことを心配しているのか？）

そのあと、いろいろ考え、首をひねってばかりいた。

第16話：新しい信じる人 現世

一護は、重い足取りで家に向かっていった。

ロイヤがどこかに行ってしまったあと、ずっとロイヤのことばかり考えていた。

いくら敵だからといっても、石田は言いすぎだ。

一護（たぶん、オレはあいつの気にしてたことを言った……）
そして、石田はそれをひどく言った……傷ついたよな……）

織姫も心配して大丈夫などと声をかけてくれたが、少し微笑んだだけで何も言わなかった。

もし家に居なかつたらどうしようなどと、不安を抱えながら家に入る。

すると、一心にいつも通り蹴られたが、相手をせず、自分の部屋に向かった。

一心も妹たちも心配そうに一護の後姿を見ていた。

足取りが重い。

階段を全て登り切り、ドアノブに手をかける。

そこから体が動かない。

もし、最後の希望が消えてしまったら、自分は人として最低なことをしたと、一生抱えて行かないといけない。

意をけて、ドアを開けた。

部屋には誰にもいなかった。

一護はフラフラと部屋に入るとベットに倒れこみ、枕に顔をうずめる。

一護（・・・オレは・・・最低だ・・・！！）

自分を責め、ギリリと歯で音を鳴らすほどかむ。

「何してんだよ。ガキ」

その声に、飛び起きた。
すると、あの綺麗な透き通る蒼い瞳、光で輝く銀色の髪の毛、絶世の美男子だと誰もがいう顔が、謝りたかった男、ロイヤが居た。

一護「お・・・まえ・・・」

ロイヤ「？なんだよ。ひでえ顔」

一護「！！・・・ごめんな・・・」

震える声で謝る。

ハトが豆鉄砲を食らったような顔を一瞬したが、すぐに理解したの
だろう。

悲しそうに眼を伏せた。

一護「これくらいで許してもらえとは思ってねえ。だけど、オレ
は謝りたいんだ」

ロイヤ「・・・」

黙って一護を見ていたロイヤだったが、ふっと微笑むと、一護の頭
に手を置き、くしゃくしゃとなる。

ロイヤ「あはははっ！お前は面白いな！・・・許す！」

一護「・・・！」

ロイヤ「・・・お前を見て、人間に興味を持った」

ベットに腰掛け、一護の目をまっすぐみていう。

ロイヤ「オレは、知りたい。人間のこと。人間の友情・心・仲間を。オレはずっと仲間が欲しかった。ずっと一緒に居てくれる仲間を・

・
今まで数えきれないくらい仲間を作ってきたが、その友情は全て嘘だった。

あるときはオレの血を狙って、あるときはオレを倒して英雄になるうとして・・・

今までのなかで心から信じてるのは最初だけだ。
後は全部心を開かなかった。

今でも心を開いてるのは2人だけだなあ。

だけど、一人はオレの本当の悲しみ、苦しみは分からねえだろうな。
・・・あつ、間違えた。3人だ」

はははと、苦笑する。

なぜ増えたのか分からず一護は顔を歪める。

一護「何で増えたんだ？虚の中にできたのか？」

すると、ロイヤは首を振る。

ロイヤ「・・・黒崎・・・お前だ」

一護「オレが・・・!!!?」

敵を信じるなどあり得ない。

だけど、ロイヤは敵の自分を信じてくれた。

ロイヤ「黒崎、お前はオレを信じてくれるか？」

一護がはすぐに笑顔になり、言う。

一護「あたりまえだろ！」

ロイヤ「んじゃ！改めて今からよろしくな！・・・一護！」

一護「俺こそよろしくな。ロイヤ！」

二人は固く握手し、笑いあう。

姉と弟は、それぞれ別の道を進もうとしていた。

？破壊・銀？

オレは仲間を作る

お前は孤独を選ぶのか？ 仲間を選ぶのか？

どっちにしても 俺たちの道は違う

(もう 足並みは合わない)

第17話：頼みごと＝命令

ガイヤは、またもや藍染に呼び出されていた。

いつものように、余裕で微笑み藍染の前に立ち、話を待つ。

ガイヤ「・・・」

藍染「ああ、そう警戒しないでくれ。今回の頼み事は簡単だ。ちょっとこつちに来てくれないかい？大事な、ほかの者たちには知られてはいけない頼みごとだからね」

ガイヤ「ハイ」

無表情で藍染に近づき、藍染の口に耳を近づける。

藍染は、いつもの声で言う。

藍染「ノイトラとの子を、作ってくれないかい？」

ガイヤ「！！・・・」

考えていなかった頼みごとに、動けなくなる。

しかし、考える。

ここで自分が断れば藍染は自分たちを仲間として見てくれない。それは嫌だ。まだ信じていないが久しぶりの仲間だ。

好きでもない男と体を重ねるなど嫌だ

だが、仲間を失うのはもっと嫌だ

自分には 選択肢が残されていない これは頼みごとではなく 命
令だろう

震える唇を必死に動かし、返事をする。

ガイヤ「は．．い．．ご命令とあれば．．．」

いつもの笑みで藍染は笑っていた。

分かっている、しよせん藍染には自分たちは駒の一つだと。
だが、それでも．．仲間．．．

重い足取りで、ガイヤはノイトラのもとに向かう。

ガイヤ（どんな顔をして会えばいいんだ……？どんな……どんな顔で……）

フラフラと歩き続ける。

すると、ザエルアポロが声をかけてきた。

ザエルアポロ「やあ、ガイヤ。どうしたんだい？顔色が悪いよ？」

ガイヤ「……気のせいだ」

そうはいったが、悔しいほど人の変化に鋭いザエルアポロだ。気づかないはずがない。

しかし、何も言わなかった。彼なりの気遣いだろうか。

そのまま、ザエルアポロは手に持っていた大きな瓶をガイヤに差し出す。

ザエルアポロ「この前頼まれてたものだよ。君にはあまり効かないからね。効果は1時間くらいだね」

ガイヤ「そうか、すまん」

謝り、瓶を受け取る。

顔にかかっていた桃色の髪をあげ、話始める。

ザエルアポロ「君は運がいい。丁度暇だったからね。だから作ったのさ。暇じゃなかったら作ってなかった。・・・まあ、君の血も面白かったから僕は満足だ」

ガイヤ「気色の悪いやつだな。人の血をみて満足するとは」

ザエルアポロ「科学者だから。ね、当然だよ」

そういうと、^{ソニート}響転でどこかにいってしまった。

一人になったガイヤは、もらった瓶を懐にしまつと、歩き出した。

ノイトラ「ああん？どうしたんだよ。顔色悪いぞ」

いつもの凶悪な顔でそういう。

その声を聞くと、ガイヤは言わないでおこうか思った。

ノイトラだって嫌に決まってる。

そう思うと、首を振る。

ガイヤ（違う・・・これは言い訳をしてるだけだ。本当に嫌なのは自分なのだ・・・）

少しずつノイトラに近寄り、自分より広い背中に抱き着き、話す。ピタツと、音がつくかと思うほど、ノイトラが動きを止めた。心に不安が渦巻き始めた。

ノイトラは、自分を遊びで軽く抱くだろうか

それとも、命令を無視して抱かないだろうか

暫くすると、ノイトラが立ち上がり、自分の斬魄刀を持ち、歩き始めた。

慌てて、声をかける。

ガイヤ「おっおい！どこにいくつもりなのだ！！これは藍染様の命令だぞ！！」

ノイトラ「……テーマはそれでいいのかよ」

ガイヤ「……仲間を、失わないならいい」

そういうと、ノイトラがガイヤの頭を掴む。

ノイトラ「本当にいいのか？好きでもない男とか？」

ガイヤ「お前が一番でした」

そういうと、ため息をつかれる。

ノイトラ「だったら……手加減は必要ねえよな？」

ガイヤ「？どついう意味だ？おいつ、黙って持ち上げるな！！」

ノイトラ「お持ち帰りみたいなもんだ」

そのまま自宮に向かう。

次の日に、傷だらけのノイトラを何人もみていた。

？消滅？

我らは 一丁に屈てはならぬ者

だが いるべき場所は追い出された

もう 我らがいてもいい世界などどこにもないのだ

永遠に

第18話：残る 現世

<友達・仲間>

それは、ロイヤが長い間、求めていたもの。

彼にも最初は仲間がいた。

しかし、仲間は彼と姉を裏切った。

二人はその日から心を閉ざした。もう、仲間なんて作らないように。

一護（幸せそうだな）

そう思い、一護はご飯を食べる。

今、家族で晩御飯を食べている。もちろん、ロイヤも一緒だ。

最初のうちは、何も喋らなかつたのだが、妹二人と一心が笑顔で話しかけてるうちに次第に話すようになり、今ではふざけ合ったりしている。

一心「その肉もらった!!」

ロイヤ「はっ!!悪いな。こいつはオレが貰う!!」

一心「ああ!!食べられちゃった!!」

一心が狙っていた肉を、ロイヤが先にとり、食べてしまう。

現世の食べ物がおいしいのだろう。本当に美味しそうに食べるので、

遊子が嬉しそうにしている。

ロイヤ「この肉うめーな。野菜もいい感じだ」

遊子「ありがとう。ロイヤさん」

笑いあうが、一護は分かっていた。

ロイヤがまだ心を開いていないことを。

時々、目の奥に警戒心が見える。

一護（・・・何でオレにはすぐに心を開いてくれたんだろうなあ・・・）

疑問が浮かび出てくる。

しかし、今この場では聞けないので部屋に戻ってから聞くこととし
ようと決め、肉を食べる。

風呂から上がったロイヤが、階段を駆け上ってきた。勢いよくドアを開ける。

ロイヤ「お、おがったぜ。次入れよ」

一護「・・・」

風呂上りの恰好を見て、一護は顔を歪める。
今、ロイヤは腰にタオルを巻いているだけの恰好で、まだ髪の毛からも雫が沢山落ちてきている。

一護「おまえな・・・ちゃんと服を着ろ！！髪の毛も拭け！！そのあとは廊下の水拭いて来い！！」

ロイヤ「へいへい」

まったく世話のやけるやつだ。と、一護は思う。いいお兄ちゃんだ。

一護（・・・こいつの姉ちゃん苦労してんだろっなあ・・・）

いいえ、まったく。すべて蹴って片付けてます。byガイヤ

ロイヤ「さっさと風呂入れよ。オレはおとなしく漫画読んどくからよ」

一護「本当だな。じゃあ、おとなしくしてるよ」

服を持ち、下に降りる。

言った通り、ロイヤは漫画を読み始めた。コンが邪魔するまでは。ロイヤのことが気になったコンは好奇心から押し入れから出てきた。

コン「よー！テメーか？破面ってのは」

ロイヤ「・・・」

冷たい目でコンを見る。

ロイヤ（なんだコイツ？現世の人形はただのものはずだよなあ？動かないよな・・・なんで動いてんだ？）

コン「ん？なんだよ。オレのあまりのかつこよさに男のお前でも惚れちゃいそうか？まあ、俺様だからしょうがねえゴボアツ！！！！」

ロイヤ「どうなってんだ？こいつは」

一瞬でコンの体を片手で勢いよくつかむ。

そのあと、どうなってるのかいろいろ見て、最終的にコンの口に目が言った。

何かやばいことをされると思ったのか、コンは暴れる。

コン「なっ！何しやがる！離しやがれ！俺様を食べてもつまかねえぞ！！」

ロイヤ「・・・やっぱ口の中だよな」

コン「！？やつやめグブ！！」

コンの口の中に指を突っ込み、探る。

すると、思った通り、口から何かが出てきた。義魂丸だ。ぎこんがん

手のひらに乗せ、コロコロ転がす。

ロイヤ「なるほど、人形の口にこれを入れて動かしてたのか・・・五月蠅くないからこのままでいいか」

そっぴい、又イグルミと義魂丸を一護の机の上に置き、漫画を読もうと漫画に手を伸ばす。

しかし、気配を感じ、手を止めた。

「ふむ、なかなかやるのう。わしに気付いたか」

そっぴい、褐色の肌の女性は窓から入ってくる。警戒したまま、ロイヤはその場から動かない。

夜一「ん？そっ警戒するな。一護が居ない今のうちにとっつての。・・・元柳斎からの伝言じゃ」

ロイヤ「元柳斎・・・テーマーら護廷十三隊のボスか・・・そんなお偉いガキがオレになんのようだ？さっさと言いやがれ」

夜一「そっせかすな。直ぐに終わる。伝言はこっぴい？お主が危害を加えなければわしらも何もせん。しかし、おぬしが危害を加えればワシ自らがおぬしを倒す。もし、それを聞いても現世に残るのなら、見張りを交代でつける？じゃと。どうするのじゃ？現世に残ればおぬしは毎日どんな時でも敵に監視させられておる状態じゃぞ？

帰るのか？残るのか？」

返事を待つため、座ろうと腰を落とす。

しかし、返事は予想より早く帰ってきた。

ロイヤ「はあ？答えなんか決まってるだろ？オレは残るぜ」

夜一「・・・おぬし・・・そんなあっさりといってよいのか？」

夜一が尋ねる。

死神たちを足止めをするためなら、現世に残らなければいけない。それは藍染の命令だ。

しかし、現世に残っていれば死神の監視が付き、ふっと漏らした自分たちの情報を聞かれ、戦いのときに不利になるかもしれない。これは、真剣に、長い時間をかけて考えて答えなければいけないことだ。

しかし、ロイヤは考えもせずという。だが、彼にはそんなことどうでもよかつたのだ。

ロイヤ「俺たちのことをなめんなよ死神・・・俺たちは弱くねえ。それにな・・・」

夜一「？」

ロイヤ「オレは一護と一緒に居るって決めただよ。藍染の命令なんかどうでもいい。オレはオレの意志でここに残る」

意外そうな顔で夜一は驚いていたが、直ぐにふっと笑う。

夜一「なるほどの・・・おぬし、いいやつかもしれぬの。敵と一緒にいたいなど・・・」

ロイヤ「ああ？オレが優しい？馬鹿言っんじゃねえよ。オレは、敵だ」

それだけ言うと、ロイヤは漫画を読み始めた。

夜一も、何も言わずに帰って行った。

？破壊？・銀

もし オレの行動で味方が死んでしまうのなら
それでもいい

どうせ 嘘の友情

壊しても 殺しても どんなことをしても 自分には関係ない

第19話：利用のため

ガイヤは、ハリベルの宮でくつろいでいた。その間に藍染達は話し合っていた。

藍染「二人は、命令に従ったようだね・・・いいことだ」

紅茶に口をつける。

市丸「せやけど、子供まで生ませて、ホンマ、恐ろしい人やなあ」

不気味な笑みを顔にはりつけ、言う。

たとえ、仲間がどれだけ自分を敬い、慕っいても、藍染はその？情？を決して受け入れない。

所詮、藍染にとっては仲間は全て、野望のための捨て駒に過ぎない。命さえも利用し、使えなくなれば捨てる。彼にはそれが当たり前。普通の破面どころか、十刃さえも捨て駒。これほど残酷な男が他にどこにいるだろうか。

藍染「・・・破面の妊娠・出産は人間より倍以上早い。それは、妊娠して弱っているときに敵に狙われてしまうからだ。敵にやられる前に、と、破面の妊娠はずっと早くなった」

市丸「あと一週間くらいロイヤが足止めしてくればガイヤは出産

するやろつなあ。もうすでに腹が膨らんできたで」

藍染がロイヤを現世に送ったのはこのため。ガイヤが出産するまでの時間稼ぎだ。

仲間にしたときから、ガイヤには子供を産まそうと考えていたのだ。

藍染「子供も早く育つ。親が二人とも十刃だ・・・子供も強いだろう。これで戦力が増える」

要「ハイ。藍染様に劣りますが、十分戦力になります」

市丸「あらら、なんや可哀そうやなあ、生まれてくる子供。戦いに利用するため生まれてきたなんて・・・ホンマ可哀そう」

相変わらず、ギンが何を思っているのか分からない。

アパッチ「どんな子が生まれてくるんだろっな」

ミラ・ローズ「そりゃ、美人で、凶悪で、強い子供だろっ」

スンスン「全く、どうやったら凶悪な顔の美人が生まれてきますの？まったく、低脳はこれだから・・・」

ミラ・ローズ「あんだと！！！！？」

ハリベル「少し静かにしてやれ」

そういうと、小声で喧嘩を始めた。

静かにするなら喧嘩なんてしなればいいのに。

ハリベルはため息をつくど、謝る。

ハリベル「すまない。騒がしくて。しんどいだろう？」

ガイヤ「いや、静かより賑やかの方がよい。面白いからな」

ハリベル「そうか……」

そういうと、ハリベルは悲しそうな顔でガイヤの少し膨らんだお腹を見る。

ガイヤのおなかにいる子供は、戦いに利用するために生まれてくる。なんて残酷な運命なのだろう。

すると、ハリベルの表情に気付いたガイヤは微笑む。

ガイヤ「安心しろ、この子は死なせたりせぬ。絶対に。我が命に代えても守る」

ハリベル「そうか、では安心だな」

そういうが、不安だった。いくら十刃と言えど、子供を守りながら隊長と戦うのは無理がある。

分かってはいるのだが、今は言えなかった。せめて、今だけは現実を見せないでいてあげたかったからだ。

ガイヤ「……直ぐに子供は生まれるだろうな。破面の妊娠は短い。そうだ。成長も。前に読んだ本にそう書いてあった。大人になれば、

戦えばいいのか、逃げればいいのかわかる」

ハリベル「そうか・・・ノイトラはどうした？こんなお前を放棄か？だったら私がアイツをしめ」

ガイヤ「わー！待て！早まるなハリベル！いつもの冷静なお前はとうした！」

恐い顔になり、斬魄刀を抜こうとしたハリベルを急いで止める。

ガイヤ「ノイトラは放棄などしておらん。ちゃんと子供についての本を読んでおったわ。あ奴はあ奴で父親になることが嬉しいらしいのう・・・」

そういうと、自分の腹をゆっくりとなでる。

ガイヤ「・・・せめて・・・現実を知るまでは不幸なことなど無ければのう・・・」

利用されるという事実を知るまでは、幸せでいてほしい。それが彼女が考えた母親としてすることだとおもった。

テスラ「ノイトラ様。これで全部ですよ」

ノイトラ「おう。そんじゃ休んでろ」

テスラ「ハイ・・・」

本当は手伝ってあげたいのだが、主の命令なので仕方がない。テスラは部屋を出て行った。

包帯が体中に巻いてあるノイトラは。直ぐに生まれてくる子供のためにと、子供についての本を読み漁っていた。

ノイトラ「……てか、オレの顔見て泣かねえかな……」

そついいながらも本から目を離さない

バゴンツ！！！！メキイ！！

すると、いきなりドアがすごい音をたてて開かれた。

驚いて、ドアの方を見ると、破壊したドアの横に、ウルキオラ、グリムジョー、ザエルアポロがいた。

ウルキオラ「おい、壊れてしまったぞ」

ザエルアポロ「いや、君が思いつきり開けたんだから当たり前だろ。

僕は知らないよ」

グリムジョー「オレも知らねえぞ」

ウルキオラ「では、無くそう」

そういうと、ドアを引きはがし、壁に立てかけ、何事もなかったかのようにポケットに手を入れ、ノイトラの方を向く。

ノイトラ（またテスラに怒られるじゃねえか！！）

ウルキオラ「来てやったぞ。ノイトラ」

グリムジョー「とりあえず現世の花屋から花を盗んできて花束を作ってみた。やる」

ノイトラ「盗んだもんもらっても嬉しくねえよ！！何しにきたんだテメーら！！」

ザエルアポロ「馬鹿だね、君は。茶化すために決まってるだろう。ガイヤがおめでただって聞いてね」

ノイトラ「チッ、・・・藍染の命令でしただけだ。好きでやったんじやねえ」

すると、グリムジョーがニンマリ笑ってほんの山を指さす。

幸せなのが恐ろしい

恐ろしい

恐ろしい

後で 絶望を味わうから

3・「話し」

主の命令 「一緒にいる」

絶望は冷たくする

すると 姉は泣く 昔を思い出し

もう あれは大昔のことなのに 悲しみは一生消えはしないらしい

絶望は探す 姉を

すると 姉は犠牲の場所にいた

やはり 女子同士の方が落ち着くらしい

その時 弟が帰ってくる

死神に 「寂しいんだろ」 といわれて

素直になれず 帰ってきた

最後には 強制的に現世に送られた

王の頼みごと 絶望との子供を作ること

分かっている 王は自分たちの命など どうでもいいのだと

それでも 久しぶりの仲間 離したくなかった姉は 頼みごとを聞く

途中 狂気に瓶を受け取り 絶望のもとに向かう

絶望は 姉に情けを駆けるが 姉の意志は変わらなかった

とうとう 絶望は姉を抱いた

子供をはらんだ姉

戦いに利用されるために生まれてくる我が子

悲しい運命を背負わせてしまうなら

現実をしるまでの間 幸せにしようと言っ

王は笑う 仲間とともに

仲間の命など 捨て駒に過ぎない

しかし 逆らうことはできない

王は 強いから

朝寝坊した弟 代行と一緒に暮らす

代行も なぜ止めているのか不思議に思いながら学校に向かう

理由はなんとなくわかる

弟を一人にしては壊れてしまいそうな気がしたから

そんな時 死神が現れる

戦いが始める

しかし 弟は逃げ出す

代行は なぜ一緒にいるのか理由を聞かれる

学校に着くと 仲間が迎えてくれる

それが弟は 嬉しかった

しかし 昼 3人にいるわけを問われ 心を傷つけられ 今の場所に帰る

虚圏に帰り 姉に強制的に戻されてしまう

代行は とぼとぼと家に帰る

弟を傷つけたことを 気にしながら

おそるおそるドアを開く

そこには 誰も居なかった

代行は自分が酷いことをしたと後悔する

しかし 弟は遅れて帰ってきた

そして 言った

人間のことがもつと知りたいと

弟は代行に心を許した

完全にはココロを開いていないが 弟は笑うようになった

なぜ 自分には直ぐに心を開いてくれたのか疑問に思いながら 代
行は一階に向かう

弟は一人 部屋に残る

すると 黒猫は入ってきて 行った

帰るか 残るか

弟は迷わずいう 残ると

代行と一緒にいたいからだと

第20話：順番 現世

ロイヤは、笑顔で一護と話をしていた。浦原商店で。夜一が、見張りをつける話をするために呼んだのだ。もちろん、死神たちも集まっている。

死神たちはロイヤを警戒してきている。しかし、ロイヤは無視をして一護と楽しそうに話している。しかし、体からはビリビリと警戒していることが伝わってくる。

ロイヤ「一護、これって障子ってえやつか？和風の」

一護「そうだけ」

ロイヤ「これは畳だろ？お前の家にはねえな」

一護「ああ」

浦原「あの〜・・・そろそろ話を初めてもいいっすかね？」

ロイヤ「なあなあ一護」

浦原「ちょっと！少しはアタシの話を聞いてくださいよ！...！」

そういわれると、ロイヤは冷たい目で、舌打ちをする。

浦原は少しシヨックを受ける。

夜一「はぁ・・・もうよい。ワシがする。早速じゃがの。この中から今日の見張りを決めるのじゃ」

ロイヤ「本当に早速だな」

キラキラと顔を輝かせながら、夜一は、死神たちを指さす。本当に早速だ。

日番谷「決めたら、次はだれにするのか順番を決めていけ。絶対だ」

ロイヤ「うるせえな。いちいち言われなくても分かってたんだよ。テーマみたいに馬鹿じゃねえ」

日番谷「なんだと？喧嘩売ってんのか？」

ロイヤ「はぁ？何馬鹿なこといいやがってたんだ？誰も喧嘩なんか売ってねえよ、チビ」

その余計なひとりで、日番谷はキレた。

『チビ』という単語は、彼には絶対に言っではいけない言葉なのだ。

日番谷「うるせえ！！無駄にでかいテーマに言われたくねえ！！」

ロイヤ「んだとクソガキイ！！ぶつ殺すぞ！！」

夜一「黙っておれ！！」

ゴン×2

拳骨が一発ずつ二人の頭に落とされた。

日番谷は叫ぶのを我慢し、青筋を浮かべながら、殴られた場所を抑えている。

ロイヤは、鋼皮イェロがあつたから少しはましだったのだろう。眉間に深いしわを寄せ、夜一を警戒して一護の後ろに行ってしまった。

一護の後ろに隠れたロイヤをみて、ルキアと恋次が「ほお」と、声を上げる。

恋次「ずいぶんなついてるじゃねえか。本当に心を開いてるみてえだな」

ルキア「うむ、最初は信じられなかったが・・・本当だな・・・」

まじまじとロイヤを見る。

すると、興味津々にみられるのが嫌なのか、ロイヤの眉間のしわはドンドン深くなっていく。

それを見た一護は、慌てて二人を見るのをやめるように言う。

二人は、すぐにやめてくれ、ロイヤのしわも浅くなった。

ロイヤ「・・・じゃあな・・・そのチビ、赤パイン、金髪、ハゲ、ナルシスト、チビの順番でいい。適当だ」

言い終わった瞬間、恋次と一角と日番谷はロイヤに蹴りを入れた。当然、ロイヤは黙っていない。

ロイヤ「何すんだゴラアツ！！！！」

一角「それはこっちのセリフだあ！！テメー！！ハゲってなんだハゲって！！」

恋次「赤パインもねえだろ！！」

日番谷「チビっていうんじゃねえ！！！！！！」

ロイヤ「ああん！！？見た目通りに言っただけだろおが！！！！」

ぎゃいぎゃい騒ぎ始める。

その時、破面の霊圧を感じた。

感じた瞬間。みんなの顔は戦う者の顔になる。今までふざけていたのが嘘のように。

ロイヤも、真剣な顔になり、すぐに儀骸を脱く。

ロイヤ「・・・なんで現世に来たんだ・・・？なんかようがあんのか？」

ブツブツつぶやく。

藍染からは足止め以外何も聞いていない。それに、いうことを聞か

ないグリムジョーを現世に向かわせ、戦わせれば、グリムジョーは途中から、藍染からさえも何かを言われても、もう何も聞き入れなくなる。なのに、なぜグリムジョーが来ているのか……

ロイヤ「……勝手に来たとしか考えられないよな……」

一護「おい、この霊圧って誰の霊圧だよ」

ロイヤ「……名前は教えてもいいけど……強さは教えられねえぜ？」

たとえ、嘘の仲間だとしても、氣遣ってしまふ。それほど、自分は仲間に飢えているみたいだ。

一護は、それでもいいと、言ってくれた。

ロイヤは、グリムジョーの部下を必死に思い出す。

ロイヤ「え〜と……確か……グリムジョー・ジャガージャックとお母さじゃなくて、シャウロン・クーファンと、豚やrじゃなくって、ナキーム・グリーンディーナ。ナルシスト、イールフォルト・グランツ。あり得ない髪型の……なんだっけな……え……エドラス・リオネス。あと、カス」

一護「お前、最初のやつ以外、余計な言葉ついてるんだけど……てか、最後の名前じゃないだろ。カスってなんだよ、可哀そすぎるだろ」

ロイヤ「カスの名前わな、ディ・ロイ・リンカーっていうんだぞ」

「護」最初から名前を言っておけよつか！！？」

はっはっはっとならうロイヤに、「護がツッコんだ。

グリムジョーは、ノイトラをからかった後、現世に居た。後々面倒にならない様に霊圧のある物を全て殺すために。

グリムジョー（命令違反だとか言われても知るかよ……オレはテメーの忠実な部下じゃねえ）

今はまだ、仮の部下としているだけ。

それに、戦いたいのだ。一番の理由はそれ。

直ぐに、部下たちが来た。
適当に話をし、戦いを求める獣の血で言う。

グリムジョー「少しでも霊圧のあるやつは・・・皆殺しだ」

全員、その言葉を聞くと、霊圧があるところにそれぞれ向かう。

第21話：襲撃 現世

「奴等、動き出したぞ」

霊圧が動き始めたのを伝令神機で見ている。直ぐに、皆に知らせ始める。

「……！茶渡のところに一人向かっています！！残りはここに……！！！」

「分かった。テメー等！！いくぞ！！」

「……………はいつ……………」

返事をし、日番谷たちは儀骸を脱ぎ棄て、死神になる。

そのまま、浦原商店を飛び出し、空に昇る。

暫く待つと、人影が現れた。破面だ。

すると、その中で、長身の男が挨拶をしてきた。

日番谷たちは油断なく、いつでもキレるように斬魄刀に手を添えておく。

「いんばんは」

「……！！？」

一瞬消えたため、驚いたが、すぐに霊圧を感じ、斬魄刀を抜き、後ろへふる。

すると、長身の男の斬魄刀とぶつかった。

男は、少し驚いた顔で日番谷を見る。

「これは驚いた。少しは怪我をさせられると思ったんだが・・・やはり、そう甘くはない・・・か・・・」

「・・・なめんなよ・・・」

そういうと、男、シャウロンはバカにしたような目で日番谷を見て言った。

「おっと、別になめてはいませんよ。まだ、ね」

力を強め、日番谷を押し。

直ぐに日番谷は瞬歩で距離を取る。

見ていた4人も、斬魄刀を抜き、構える。

「一角！！弓親！！恋次！！直ぐに片付けるわよ！！」

乱菊が、大声でいう。

3人はやる気満々でそれぞれ答える。

「はっ！言われなくても分かっているぜ！！どいつだあ！？一番強いやつは！！！！」

「やれやれ、美しくないねえ……でも、まあいいかな」

「オレも全力で行きますよ！」

敵は、斬魄刀も抜かず、挑発的な格好でただみてるだけだ。その時、金髪の男が何かを感じ取った。舌打ちをし、苛立ったように仲間伝える。

「カスが……もう終わったのか……」

すると、仲間も気づいたらしく、髪の毛が半分ずつで違う大きな男が、死んだ仲間のことを言う。

「アイツは破面だつてことが信じられねえくらいの弱さだからな。そこら辺の屑死神でも殺せるだろ」

その言葉には、仲間が死んでも悲しみなどない。彼らには、あまり仲間という「情」が無いのだ。

「……」

「さて、話は終わりにして、早く終わらそう。我らの王のために」

シャウロンが言う。破面たちが斬魄刀を抜き、日番谷たちをみる。

次の瞬間、剣劇が始まった。

一方、ルキアとともに、茶渡を狙いにいった破面を追いに來ていた。ロイヤは一護についてきていた。

一護は、仲間同士戦うのはつらいだろうから待っていると、ロイヤに言ったのだが、ロイヤは頑として受け入れなかった。そのため、ついてきたのだ。それでも、一護はまだ心配していた。

「てか、本当によかったのか？ついてきて？本当にか？」

「お前、しつこいぞ。本人が言ってんだから言いに決まってんだろ

「いつまでもうじうじ言ってるじゃねえ」

少し苛立った声で答える。

それでも、一護はしつこく言う。

「うん……でもなあ……」

「しつこい……」

「ぎゃおっ！！いでえ！！いでででででででええええええええええええ！！！！」

遂にキレたロイヤに腕をひねる。

あまりの痛さに、一護は涙目で叫ぶ。

そんな2人をみたルキアはあきれ顔になる。

「まったく、何をしておるのだ貴様等は。静かにせんと帰らすぞ」

「あっ、そうか。帰らせればいいのか」

「？」

何かを思いついたロイヤがぼんつと手を打つ。

二人が、いきなりどうしたんだというような顔でロイヤを見たが、ロイヤは気にせず、急に走り出した。

少しの間、呆然と見ていたが、遅れて、慌てて二人が追いかける。

暫くすると、今まさに、茶渡を殺そうとしている、破面が居た。デイ・ロイだ。

その光景をみたロイヤは響転で移動し、デイ・ロイの手を止める。手を止められ、だれに止められたのか、デイ・ロイは自分の手を持っている相手を見た。

そして、ロイヤだとわかると、なぜ居るのか分からないデイ・ロイは混乱する。

彼には知らされていなかったみたいだ。

「なっ・・・なんでテメーがいやがるんだ・・・おかしいだろ・・・確か十刃は虚圏で待機のはずガフツ!!!」

「ハッい、強制的に帰らせる」

デイ・ロイの腹を殴り、気絶させる。

そして、空間を裂き、直接、デイ・ロイを虚圏へ投げ込む。

これなら、しばらくの間邪魔は来ないはずだ。厭きた一護がロイヤに話しかける。

「お前、仲間になんてことしてんだよ・・・」

「大丈夫だ、アイツはカスだからな」

腰に手を当て、自信満々に言う。

しかし、一護はディ・ロイに同情していた。

「ああ、気の毒なあだ名のやつか・・・」

「これでは私の仕事が無くなってしまったではないか！...どうしてくれる！」

「知るかチビ」

ルキアがロイヤにそういうと、ロイヤが余計な一言をつけて返す。直ぐに喧嘩を始める2人。止めもせず、一護はのんきにみているだけだ。

「私はチビではない！！」

「なにいつてやがる！！チビのくせn！！？」

言葉は続かなかった。

なぜなら、顔に向かって大きな手がきたからだ。

とっさに、その時は顔を下に向けてよけるが。縛っていた髪の毛を捕まれた。

そして、ブチブチという音を立てながら、髪の毛が千切れたり抜けたりしながら、後ろに投げ飛ばされ、民家にぶち当たった。

ふざけていた2人は、斬魄刀を構え、突然攻撃をしてきた水色の髪をした破面に刃を向ける。

破面、グリムジョーはロイヤが邪魔したことを怒っていた。

「んだよ・・・余計なことしやがって・・・先にテメーを殺すぞオ
イ」

そついい、ロイヤを投げ飛ばしたほうを見る。

壊れた民家の中から、長さが変わった髪をかきあげながら、ロイヤ
が顔に口が引き裂けるほどの笑いをはりつけて出てきた。

「へっ・・・殺せるもんならな・・・殺してみやがれよクソガキ
イイイイイイイイイ！！！」

投げ飛ばされたことにキレたロイヤが、髪の毛をなびかせながら、
素手でグリムジョーに襲い掛かる。

第22話：なんで 現世

「藍染の前に無様な格好で突き出してやるよお！！」

そついい、グリムジョーに向かって拳を放つ。

しかし、簡単にグリムジョーは受け止め、余裕そうにやりと笑う。

「こんなもんかよお前の力は・・・こんなもんが神の力かよおお
おおおおお！！！！」

「ぐうつ！」

拳が放たれてきたが、体をひねり、何とかよける。だが、すぐに別に拳がやってきた。

一発目をよけるのに気を取られていたロイヤの腹に、拳がめり込む。
ロイヤは、血を吐きながら後ろに吹っ飛ぶ。

「ロイヤー！！！」

「『次の舞・白漣』！！！」

急いで二人が加勢に入るが、グリムジョーは刀も抜かずに素手で攻撃を防いでしまう。

「おいおい死神。卍解を見せてみるよ。今のてめえらじゃ、今の状態のオレに絶対に勝てねえぜ」

ゆっくりと二人に歩み寄る。

二人は、何も言わずにただ斬魄刀を構える。

そんな二人をみたグリムジョーは、二人が卍解をする気がないと分かり、舌打ちをする。

「・・・チツ、する気は少しもねえってか？・・・じゃあ、邪魔だ。消えろ」

虚閃を放とうと、手を出す。

その時、その出した手を掴もうと横から手が現れた。

反射でとっさに手を引っ込ませる。

「おしいなあ・・・もう少しでその汚ねえ腕をひきちぎれたのによ・・・逃げてんじゃねえよ・・・」

髪をなびかせながら、ロイヤはいう。

邪魔をされたグリムジョーはロイヤにと、標的を替える。

「そついや、一度てめえとやってみたいと思ってんだよなあ・・・ここでやっつくか」

「いいなあ・・・オレも丁度でめえをぶち殺したいと思ってたところだ。やるうぜグリムジョー！！！！殺し合いだあ！！！」

二人は素手で戦い始める。

しかし、その中で、グリムジョーがロイヤの耳に口を近づけ、何かを話した。

小声だったので、一護とルキアには聞こえなかったが。

何か重要なことだったのか、ロイヤは目を見開いて驚いていた。

その隙に、顔面を殴られ、ロイヤは地面に落ちる。

止めをさそうと、グリムジョーは斬魄刀を抜く。

「今の状態じゃねえと後々面倒だから・・・元の姿になんかさせねえぞ」

斬魄刀を動けないロイヤに振り上げる。

しかし、その手は止められた。

「命令違反だ。グリムジョー」

東仙要がきたのだ。

目を見開いてグリムジョーは驚くが、すぐに文句を言い始める。

だが、最後は藍染が怒っているということ、しぶしぶ帰り始めた。

一護とルキアは何も言わないが、ここで怒ったのはロイヤだった。

「ふざけんなよグリムジョー！！逃げんのかよ！！！！オレはやるぜ！！今ここでためえをぶち殺す！！」

斬魄刀を抜き、空中に飛び上がり、グリムジョーに斬りかかる。それをみたグリムジョーも斬魄刀に手をかけようと手を動かす。しかし、その時、ロイヤの目に、銀色の髪が入った。

反射でロイヤは思わず両目をつぶってしまう。それと同時に、自分の左胸を何かが貫いた。強烈な痛みがロイヤを襲う。

貫いたものは、要の斬魄刀だった。

要の斬魄刀がロイヤの左胸を貫いたのである。

「……」

「……？と……うせ……ん……？」

ゆっくりと後ろを向く。

すると、今度は右側を深く、縦に切られた。

傷から血があふれ出る。

ロイヤの体はゆっくり傾き、重力に従い落ち始めた。

それを見た一護が地面に落ちる寸前にロイヤを受け止める。

ロイヤは必死に息を吸う。この傷はすぐに治さないと、ロイヤは死んでしまう。

早く、織姫に治してもらわなければ……

「ロイヤ、お前は何をしているんだ。藍染様はお前のことも怒っている。その傷は、罰のためにつけた」

それだけいうと、二人は消えてしまった。
残された3人は、急いで織姫の家に向かう。

?破壊?・銀

なんで オレは味方に刃を向けられている？

なんで 味方はオレを傷つけた？

第23話：いるの？ 現世

一護は、血まみれのロイヤを抱き上げる。

「早く！こいつの傷を治さねえと・・・死んじゃまう！！」

「分かっておる！落ち着け一護！」

「落ち着いていられるかよ！死んじゃまうかもしれねえんだぞ！」

一護の腕の中では、ロイヤが必死に息をして、激痛に耐えていた。超速再生らしきもので少しずつ治っていつているが、ロイヤの超速再生の治るスピードは遅く、とてもじゃないが間に合わない。そのため、一護はさらに焦っているのだ。

そんな一護を、ルキアは落ち着かせようとする。焦れば正しい判断がうまくできないからだ。

「落ち着け一護。いいか、織姫は近くにいるはずだ。だから絶対に助かる！こやつも、織姫のことも信じる！」

「ルキア・・・ああ！」

堂々としているルキアを見て、落ち着きを取り戻した一護が力強く返事をする。

すぐに急いで織姫の霊圧を探り、屋上に上がる。

すると、そこには織姫の治療を受けている日番谷たちがいた。限定解除をするまでにかなりやられたようだ。しかし、もうほとんど傷は治っている。

一護は、織姫の近くに行き、腕の中のロイヤを見せる。あまりの傷のひどさに、織姫は一瞬声を失った。

「頼む井上。お前しかいないんだ。こいつを救えるのは」

「黒崎くん……うん、分かった！」

直ぐに、能力を使い、治療を始める。が、日番谷たちを治した後などで、織姫は疲れている。いつものスピードで治っていかない。

「……かなり深い傷ね……織姫が治してもしばらくは動けないわ」

「本当は破面なんか直さなくてもいいんだぜ？オイ破面。一護に感謝するんだな」

「……い……ち……」

汗を大量に流しながら、ロイヤは必死に一護の顔を見ようと瞳を動かす。しかし、うまく動かせず、視界が揺れる。

そのうち、一護にそばにいるのか心配になり、手を動かそうとし始めた。

今の彼には、一護しか信じれる人しかいない。一護が居なくなれば、昔のことを思い出し、彼の精神は壊れてしまつかもしれない。それほどまでに彼は傷つき、仲間を求めている。

「一護……一護……そこにいるのか……？本当に……？どこだよ……どこに……いるんだよ……」

手を動かし、一護に伸ばそうとするが、力が入らず、少ししか上がらない。そんな彼の手を、一護は握り、言う。

「大丈夫だ。オレはちゃんとここにいるぜ」

「ほ……んとう……だ……な……」

そっぴい、目をゆっくり閉じていく。

最初は、死んでしまったのかと思ったが、違うことが分かり、肩を下す。安心して、眠り始めたみたいだ。

規則正しい、静かな寝息が聞こえ始める。

その間に、織姫はドンドン傷を治していく。

「こいつ、敵がいるのにのんきになるたあ……のんきな奴だな」

「本当だね。信じられないよ。……僕はこいつが美しいのが気に食わないんだけど」

「本当ね。どうやったらこんなに綺麗になるのか教えてほしいから
いだわ」

ツンツンとロイヤの顔をつつく。

いつもくくっている髪は地面に広がり、まるで女のように見える。
前に、一護が風呂上りのロイヤにそれを言ったら殴られたが。

「……ふう〜……終わったよ、黒崎くん。これで大丈夫だよ」

「そっか、ありがとな。井上」

笑顔でお礼を言う。

すると、織姫は顔を赤くして早口でしゃべり始める。

「うっ……うっん!!? 私これくらいしかできないからお礼なん
か言わなくてもいいんだよそれに黒崎くんの大切な友達だったらな
おさらだし私もこの人が悪い人のようには思えないし黒崎くんの頼
みだしお礼なんかいらないよ!!」

息継ぎもせずに一気にいう。

あまりのすごさに一護がぽかんと織姫を見ている。

「……すごいな……どうやったら息継ぎなしでそれだけ言えるん
だ……?」

「なっ・・・なんでだろね！あははは・・・！」

顔を赤くしたまま笑う。

そんな織姫を見て、乱菊が「がんばれ織姫！」などと言っていた。

ほかの男子たちも織姫の気持ちを分かっていたのだが、一護だけは分かっていなかった。

もう一度織姫にお礼を言うと、ロイヤを優しく抱え、家に向かった。

? 斬月?

たとえ敵でも こいつはオレの友達・仲間

誰がなんと言っても

オレの大切な友達なんだ

第24話：陣痛

グリムジョーはいらだっていた。

先ほど、要に罰として腕を斬られたためだ。しかも、十刃の地位も失ったのだ。

その証拠に、数字ははぎとられ、まだ血が出ていた。

（チクシヨウ・・・いつか絶対に殺す・・・オレは王になるんだ・・・）

今はまだ、その時ではない。この戦いで自分は生き残り、藍染たちは死神に殺されるのを待つ。

藍染たちが死ねば、自分は虚圏の王になれる。

（だが・・・まだたりねえ・・・そんなんじゃ満足できねえ）

虚圏の王で終わるのなんかまっぴらごめんだ。いつか、世界の王になる。

「何をしておるのだグリムジョー」

「ああん？」

後ろを振り向く。

すると、そこにはお腹が大きくなったガイヤとハリベルがいた。

「血の匂い・・・貴様、戦ったのか」

「なんだと、グリムジョー。藍染様に言われなかったのか。戦うのは駄目だと」

「オレが素直にはいそいですかかって聞くとおもうてんのかよ」

「・・・聞かぬな・・・」

ため息をつく。そうだ、グリムジョーはそういうやつだ。自分より強くても、絶対に命令なんか聞かない。そういうやつだ。

「しかし、お主。そのせいで力が落ちたみたいだな」

目を細めて、ガイヤはいう。数字を失ったことが分かったようだ。今更隠したって無駄だろう。いらだちながら失った理由を言う。

「ああそつだよ。現世に行って戦ったらこの通り。・・・クソ野郎が正義とかぬかしながらオレの左腕をそぎ落とすやがったんだ」

そついい、左肩を二人の方に向ける。二人は声を出さなかったが、

顔を少しがめていた。

「・・・愚かだな。そんなに力が欲しいのか」

「ああ！？テメー、自分が強いからって調子乗ってんじゃねえぞ！
！」

「乗ってなどおらぬわ。ただ、貴様は愚かだと思ってな。・・・
強くなり過ぎれば、自分から周りは離れて行ってしまう。それがど
んなにつらいことか・・・貴様には分からぬ・・・」

目を伏せ、お腹をなでる。

ノイトラと寝てから五日がたっている。今日か明日に生まれるだろ
う。

最初はその気のなかったノイトラだが、2日目あたりから子育ての
本を片っ端から読み始めた。その姿を見ると笑ってしまうが、何と
か我慢する。

さつきも動き始めた我が子がいる腹を触らせると、表情が柔らかく
なっていた。

こっそり微笑むと、グリムジョーが予想もしていなかったことを言
い出した。

「ああ、そついやロイヤにお前の今の状態言っただぜ」

「そつか・・・」

ここまでではよかった。悪かったのは次だ。

「……帰るとき、東仙に左胸を貫かれて、体を縦に深く斬られたぞ……瀕死の傷だ」

「!!!?」

顔をあげ、グリムジョーを見る。その顔は嘘を言った顔をしていなかった。

ガイアの頭の中に、グリムジョーの言葉が反響する。

ロイヤが斬られた。

東仙に。

深く。

なぜ斬られた？なぜ？

瀕死の傷

誰が付けた？

仲間が付けた。

いや、違う 仮の仲間が付けた

裏切られた ロイヤが傷ついた 私も利用される

分からない どうすればいいのか

私は何をすればいい？

我が子を産む？ 産まない？

生きる？ 死ぬ？

命令を聞き続ける？ 聞かない？

何を信じればいい？ もう信じないほうがいい？

分からない 分からない 分からない 分からない 分からない
・

一気に顔から血の気が引き、立っていられなくなり、膝をつく。と、同時に、お腹に陣痛が走る。

直ぐに気づいたハリベルが下っ端の破面を呼び、ガイヤを運ぶ。運ばれている間にも、ガイヤは痛みを感じながら混乱していた。

？
消滅
？

なんで？
なんで？
なんで？

弟は仮の仲間
に斬られた
自分は利用される

教えて
教えて
教えて

私はどうすればいいの？ どうすれば弟を護れる？

番外・happy birthday ノイトラ・ジルガ(前書き)

ひいひい!!

めっちゃ遅れてしまったあ!!

「んだと!?ふざけんな作者あ!!」

一番好きなキャラなのに……!!

ごめんよノイトラ! happy birthday!!

番外・happy birthday ノイトラ・ジルガ

ノイトラは、自宮にいた。
そして、頭をひねっていた。

(なーんか・・・様子がおかしい)

チラリと自分の優秀な従属官^{フラシオン}、テスラ・リンドクルツを見る。
彼は、朝から(時間は藍染が現世に合わせている)いつも以上に忙しそうに部屋を走り回り、まだ、朝の挨拶しかテスラと話をしていない。

これはおかしい。いつもなら、そのあと、今日の予定や、現在の虚圏の様子などを詳しく、後ろをついてきながら言うのに、今日はそれすらもしない。

そのため、ノイトラは朝から落ち着かなかった。しかも、テスラだけではない。周りもなのだ。

同じ十刃も、自分には話しかけてこず。陰が薄いため、必死に存在をアピールしようといつも騒いでいるワロンさえも、今日は騒がずに無口なのだ。

(オレが居ない間に何かあったのか?)

いない間に何かあったのなら、自分でどれだけ考えても無駄だ。ここは、下級の破面に無理やり聞くしかない。

そう思い、自宮の中を歩き始めた。しかし、どれだけ歩いても誰に

も会わない。仕方がないので霊圧を探ったのだが、なぜか全員が大広間に集まっていた。

(・・・もしかして、俺って仲間はずれにされたのか?)

流石にノイトラと言えど傷ついた。

とぼとぼと重い足取りで自分の部屋に戻ろうと、歩き始めた。しかし、すぐに足は止まった。なぜなら、目の前にお腹が大きいガイヤが腕を組んで立っていたからだ。ノイトラは足を止め、ガイヤをジッとみて、ふいっと、顔をそらし、部屋に戻ろうとする。無視されると思っていなかったガイヤは慌ててノイトラの腕をつかみ、引き止める。

「まっ・・・待たぬか！なぜ無視をする！我は貴様に用があるのだ」

「・・・なんだよ。俺だけ仲間はずれして」

「貴様・・・ふっ!!」

自分の大切な日を忘れている、そして、勘違いをしてすねていると分かって、おかしくてガイヤはつい笑ってしまった。当然、ノイトラの機嫌は悪くなる。

「何がおかしいんだよ、オレがすねてるでも思ってたのか?」

「くく……！ああ、思っておる」

「すねてねえ」

「バレバレの嘘をつくな。貴様、すねておるな」

「すねてねえっていつてんだろ……！」

自分の腕をつかんでいた手を振り払い、その腕で壁をドンツと叩く。しかし、十刃のガイヤはそんなものに脅えない。すました顔を崩し、にやにや笑ってノイトラをみている。

「お主、嘘が下手だな」

「……うるせえ……！」

「待て待て、帰るな。貴様に、とっておきのサプライズがあるのだ」

「サプライズだあ？なんでだよ」

「本当に覚えていないのだな……面白いやつだ。まあいい。とりあえず皆のいるところへこい」

そついい、ノイトラの腕をつかみ、走り出そうとする。しかし、それをノイトラが止めた。

「馬鹿か！そんな体で走るんじゃないわねえ！！」

「？さつきも我は走ってきたのだぞ？今更心配するな」

「自分の体を大事にしろ！！」

そういうと、ノイトラはきつくはない様に、ガイヤをお姫様抱っこし、
響ソニート転で移動する。

皆のいる大広間のドアの前でガイヤをおろし、ノイトラはドアノブに手をかける。そして、開く。

すると、パンッパンツという音とともに、皆の顔が現れた。

いきなりのことに、ノイトラは目をパチパチさせて驚く。しかし、次の言葉で今日が何の日か思い出した。

「……………ノイトラ様！！お誕生日、おめでと〜ございます

！！……………」

「あつ？……あつ！！」

礼儀正しく、下級の破面が礼をしたとき、ノイトラは今日が自分の誕生日だったことを思い出した。

「そうか……今日はオレの誕生日だったな……忘れてたぜ」

「はあ！？まじかよ！？」

ぼそりとつぶやくと、その言葉を聞いていたグリムジョーが驚いた声を出した。

「俺だつてお前の誕生日覚えてたのに、お前が忘れてたのかよ」

「グリムジョー。お前、確かオレが言ったから思い出していなかったか？」

「あーあー！！何も聞こえねえ！！」

「お前も人のこといねえじゃねえか！！」

胸を張っていったが、グリムジョーの後ろでお菓子を食べながらウルキオラがいう。

すると、グリムジョーは慌てて耳をふさぎ、知らん顔をしようとするが、もう遅い。彼はやっぱり忘れていたのだ。

何威張ってんだ・・・と、思ったとき、テスラから名前を呼ばれ、後ろを振り向く。

すると、テスラと一緒にそれぞれ違う箱を一個ずつ持った十刃たちがいた。

「ノイトラ様！おめでとうございます！これは僕からのプレゼントですよ！！大切にしてくださいね！捨てたりしたら駄目ですよ」

「うん」

最後の言葉でテスラの目が恐かったので、余計なことはいわず、素直に返事をした。

テスラのプレゼントを受け取ると、十刃たちもおめでとうと言いなからプレゼントを次々に渡してきた。ザエルアポロも珍しく、まともなものを渡してきた。しかし、よく見るとザエルポロの頬にパンチの跡があった。変なものをプレゼントしようとして、誰かに殴られたのだろう。

「いや、いいねえ！お祝いつてのは！オレのテンション、Maxだぜ！！」

パクパクケーキを食べながら、ワロンが話す。

その隣では、この日のために現世から帰ってきたのだろう、ロイヤがすごい勢いでケーキやらクッキーやらを食べていた。どうやらロイヤは食べ物が目当てみたいだ。幸せそうな顔で食べている。一通り食べ終わると、にやにや笑いながら近づいてきた。やはり双子、笑い方も同じだ。

「よお、今日はお前の誕生日なんだってなあ。祝ってもらって嬉しいかよポッキー野郎」

「誰がポツキー野郎だ」

そういうと、ロイヤがハツと馬鹿にしたような目で見ながら首を振る。

「はあく、これだから常識知らずのやつは駄目だね。お前しらねえのかよ。11月11日はお前の誕生日だけどなあ、同時にポツキーの日なんだよ。お前、後ろから見ればポツキーみたいだからな。ちようどいい日に生まれたな」

「よくねえよ」

「まあ、そういうわけでだなあ・・・これ、プレゼントだ」

ポリポリ顔をかきながら、大きな箱を渡してきた。開けてみると、綺麗なガラス細工だった。

現世から盗んできたのみたいだ。

「それは、現世じゃ有名なガキが作ったやつだ。値段は約10万円。どうだ？嬉しいだろ。・・・てか、勘違いすんなよ。たまたま近くにそのガキの店があったからな。オレが欲しいと思ったから盗ったんだぜ！オレはもういらなと思うたやつをあげただけだ！！」

そういうと、また食べ始めた。

ノイトラはもう一度、見事なガラス細工を見て、嘘だろ。と思う。

もついたらないのなら、こんなに丁寧に、壊れない様に包むはずがない。

「ふっ、アイツはいざというときに素直になれなくてな・・・まあ、かんべんしてやってくれ」

「だろうな」

「ノイトラー！！さあ！ケーキのろうそくを消すんだ！！」

鼻眼鏡をした藍染が大きなケーキを指さし、言う。いつもの威厳はどこかに捨ててしまったようだ。

そんな藍染の姿に必死に笑いをこらえながら、ノイトラは大きなろうそくの火を吹き消す。直ぐに、皆から歓声上がる。

ノイトラは、嬉しくなり、少し笑った。

第25話：違う道

ワロンは響転でノイトラのもとへ向かう。

もうすぐ産まれるからだ。

直ぐにノイトラのもとにつき、ワロンはノイトラの腕をつかんで早口で言う。

「早く来いノイトラ！もうすぐ産まれるぞ！父親のお前も早く行くんだ！！」

「ああ？オレが居ても役にたたねえだろうが・・・」

「いいから来る！！」

「おわあ！！！？」

ノイトラの腕を掴んだまま最高速度の響転でガイヤのもとへ向かう。あまりの速さにノイトラの足は地面についていなかった。

ガイヤが居る部屋にノイトラを放り込むと、今度はロイヤを迎えに行こうと空間を裂き、入る。

（二人はどんな時でも幸せを分け合ってきた・・・今回も・・・一緒に・・・！）

ガイヤのことは今でも好きだ。たとえノイトラとの関係を分かっ
いてもこの気持ちは消えない。

それでも、もう二度とガイヤにこの気持ちを伝える気はない。気持
ちを伝えればガイヤは混乱してしまうだろう。

（オレの役目は二人を幸せにすること）

そう考え、ワロンは走る。

ロイヤは一護のベッドの上でみんなに見守れながら安静にしていた。しかし、皆が見てくるのでロイヤは必死に視線を合わせない様がんばっていた。

そんなロイヤの気持ちを察したのか、ルキアが苦笑する。

「皆に見られて落ち着かないのだろう？スマンな。お主は珍しい虚だからな、ついジロジロと見てしまうのだ」

「珍しいだろうな。死神と仲良くなる虚なんて。今までいなかっただろうなあ。よっと」

「あっ！まだ動いちゃ駄目だよロイヤくん！もう少し安静にしてないと・・・」

そういわれると、ロイヤは大丈夫大丈夫と体をボキボキ言わせる。もう寝ておくのはごめんだからだ。

「それにしても・・・やっぱり藍染たちは酷いことするわね。仲間に瀕死の傷を負わせるなんて」

「藍染のことだから仲間のことを捨て駒のように思ってるだろうな。東仙や市丸さえもそうかもしれねえ」

「・・・そうだな。そうかもしれねえな。やっぱり、仲間なんて作

らないほうがいいかもな」

「ロイヤ・・・大丈夫だ。オレは絶対にお前を裏切らねえ！だから安心しろ！」

「大丈夫だぜ。オレは、オマエだけは信じてる」

バシバシと一護の背中を叩く。

その時、ロイヤの後ろの空間が裂けた。

直ぐにみんなは構えるが、ロイヤだけは構えない。この霊圧を知っているからだ。

「ワロン・・・」

思った通り、出てきたのは大昔から一緒にいる仲間だった。

しかし、ワロンが焦っているのに気付き、ロイヤは眉をよせる。構えている死神たちに大丈夫というと、ワロンに声をかける。

「どうしたんだ？なんか急用か？」

「ああ・・・ガイヤが・・・」

「！！！」

それだけで分かった。さっきのグリムジョーの言葉を思い出す。

ワロンはガイヤと一緒にいてやってというのだろう。しかし、自分には新しい仲間がいる。

その仲間を置いて虚圏に帰れば、一護は裏切られたと思うかもしれない。それは嫌だ。傷つけたくない。

唇を噛み、うつむく。すると、待てなくなったワロンがロイヤの腕を掴んだ。

「何してんだよ！ガイヤが待ってるんだぞ！？」

「うるせえ！！！」

ワロンの腕を振りほどき、怒鳴る。

そんなことされると思っていなかったのだろう。ワロンは茫然とする。しかし、すぐに笑いだす。

「・・・は・・・はは・・・どうしたんだよロイヤ。ガイヤががんばってるんだぞ？お前が行ってやらないと・・・」

「俺にはガイヤより大切な仲間が来た」

「！！！？」

その言葉にワロンは目を見開く。必死に喉から震える声を出す。

「そ……んなわけ……ないだ……ろ……? だって! ガイヤは実の姉じゃないか!!! なのに……それより大切な人なんか……!」

強く、拳を握る。拳から血が流れ出てくるほどに、強く。

「ガイヤにも、オレより大切な奴ができたってこと知ってるんだぜ。ノイトラだろ……. だったら同じだろ。オレにも大切な人ができた。だからいかねえ」

一護は何も言わない。自分のせいで姉との間に亀裂ができていないか心配しながら。

黙って聞いていたワロンだったが、その体が小刻みに震え始めた。まだ信じられないらしい。生まれたときから、永い、永い間、いつも一緒に居続けたガイヤより大切なものなんてないはずだと、信じていた。なのに…….

ロイヤをだましてそう思わせたに違いない、そんな嘘の仲間を殺してしまった方がロイヤのためだ、と、心の中にいる悪い自分がささやく。

そうかもしれない。だとしたら、今ここで殺せば…….

「信じられないかもしれないが。本当のことだ」

雨竜がいう。しかし、ワロンは聞いていなかった。

「嘘だ・・・ロイヤをだまして・・・そう思わせたんだろ・・・？
だったら・・・ロイヤにそう思わせたやつを・・・殺す！！！」

「！！？」

刀を抜き、近くにいた一護に斬りかかる。しかし、ロイヤに止められた。

ゆっくりとロイヤを見ると、ロイヤの目には迷いがなかった。

そこでやっとワロンは気づいた。

もうオレは必要ないんだ

二人はそれぞれ違う道を歩みだしたんだ

いつもガイヤと同じ道を歩いていたロイヤが、自分で見つけた道を進み始めた。

もう、昔とは違う。自分にはどうにもできない、ただ見てることしかできないのだ。

そう分かると、ワロンは静かに涙を流し始めた。

黙って少しの間泣くと、何も言わずに空間を裂き、帰っていった。

一護が黙ってロイヤの肩に手を置いた。

振り返ってロイヤの目には、迷いはなかった。

?獅子?

オレはもう 必要ない

オレには 何もできない

もう二人と一緒にはいられないんだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6194w/>

双子の破面と十刃

2011年11月21日19時33分発行